

参与的スピリチュアリティとトランスパーソナル理論：十年の展望

ホルヘ・フェレール カリフォルニア統合学研究所 *

訳/村上 祐介 鳴門教育大学予防教育科学センター **

Participatory spirituality and transpersonal theory: A ten-year retrospective

Jorge N. Ferrer

MURAKAMI Yusuke

要 約

本稿では、『トランスパーソナル理論再考 (Revising Transpersonal Theory)』(Ferrer, 2002) 出版以降の、トランスパーソナル研究や関連領域における参与的思想の展開について論じる。まず、参与的スピリチュアリティについて概説し、トランスパーソナル関連の文献の中で、このアプローチがいかに理解されてきたかを、学術的モデル、理論的方向性、理論的枠組みやパラダイム上の出来事という三点から論じる。次に、トランスパーソナル研究、意識研究、インテグラル教育、宗教学に対する参与的転回の影響を展望する。最後に、ウィルバー派インテグラルからの批判、宇宙-原型的批判、参与的アプローチからの批判に対する回答を行い、参与的ムーブメントの本質と今度の動向について論考を行う。

筆者がトランスパーソナル研究における参与的転回 (participatory turn) に正式に寄与することになったのは、Tarnas (2001) による本誌^[a]でのプレビューから間もなくして、『トランスパーソナル理論再考 (Revising Transpersonal Theory; 以下、『再考』)』が出版された2002年のことである¹。『再考』には概して、(a) トランスパーソナル研究の中心的な存在論的仮定や認識論的仮定を批判的に考察すること、及び(b) 当該領域においてそれまで支配的であった、ネオ・ペレニアリズム^[b]に対する参与的代替案を提示すること、という二つの目的があった。当時、Tarnas (1991) は既にトランスパーソ

ナルな特徴をもつ参与的認識論の基盤を築き、Kremer (1994) は先住民のスピリチュアリティに対する参与的アプローチを展開していた。また、Heron (1992, 1996, 1998; Heron & Reason, 1997) は、スピリチュアルな実践の関係性的な形態として参与的探究の方法を論じ、参与的存在論や参与的認識論を提示していた。それにもかかわらず、一般的なトランスパーソナルのモデルでは、普遍的発達の図式や存在論的構想と言われるものによって評価やランク付けが行われがちな、複製可能な内的体験という観点からスピリチュアリティが概念化されてきた。

『再考』では、トランスパーソナルな現象を、多様な領域 (例えば、個人、関係性、集団) において生じる多元的で参与的な事象であり、あ

* フェレール / Email : jferrer@ciis.edu

** 村上 / Email : tyuntyunkotori@gmail.com

る人の認識論的価値は、——あらかじめ決められたスピリチュアルな洞察に関する階層図からではなく——その事象のもつ、自己、コミュニティ、世界に対する解放的で変容的な力から出現するものであると捉え直した。学術的なレベルでは、トランスパーソナルな談話と、関連する宗教学内の展開（例えば、比較神秘主義や宗教間対話）、所与の世界は人の認知から完全に独立しているという Sellar (1963 神野・土屋・中才訳 2006) の批判や、Varela, Thompson, & Rosch (1991 田中訳 2001) の認知に関するエナクティブ¹⁾・パラダイムなど、心の哲学や認知科学における多くの現代的潮流とを結びつけることに努めてきた²⁾。

次いで、他の研究者が参与的視座へ関心を高めていることを受け、統合的変容の実践 (Ferrer, 2003 中川監訳 2010)、身体化されたスピリチュアリティ (Ferrer, 2006, 2008a 中川・吉嶋訳 2012; Ferrer, Albareda, & Romero, 2004)、統合的教育 (Ferrer, 2011a; Ferrer, Romero, & Albareda, 2005 中川監訳 2010)、宗教研究 (Ferrer, 2008b; Ferrer & Sherman, 2008b)、スピリチュアルな個性化と宗教の未来 (Ferrer, 2010)、形而上学と悟り (Ferrer, 2011b) などの領域と、参与的転回とのかかわりを模索した。

本論の主な目的は、『再考』出版から10年が経過した今、トランスパーソナル研究における参与的転回の現在の位置づけと継続的なインパクトを明らかにすることである³⁾。他の多くの参与的思想家による豊富な文献が存在するが、筆者の研究のインパクトに焦点をあて分析を行うこととする。まず、トランスパーソナルな現象やスピリチュアルな現象に対する筆者の参与的アプローチの概要を述べ、トランスパーソナル学で受け入れられてきた3つの観点 (学術的モデル、理論的方向性、パラダイム上の出来事)

を確認する。次に、トランスパーソナルや関連領域に対する参与的転回の影響を論じ、筆者の研究への批判に回答する。最後に、参与的ムーブメントの本質と今度の動向について総括を行う。本論を通じて、参与的トランスパーソナリズムを紹介するだけではなく、トランスパーソナル学において参与的方向性を探究し追究することに関心のある読者に、一連の学術資源を提供したい。

参与的スピリチュアリティの概要

長きにわたる思索の発展 (例えば Ferrer, 1998a, 1998b, 1999b, 1999c, 2000a, 2000b, 2001)、書籍の出版 (Ferrer, 2002)、論集の展開 (Ferrer & Sherman, 2008a, 2008b; Ferrer, 2008b) に見られるように、「参与的アプローチ」では、人間のスピリチュアリティを、ダイナミックで未知なる神秘への共創造的な参与や、命、宇宙、かつ／あるいはスピリットのもつ生成的な力によって生じるものと考えてきた⁴⁾。より具体的に言えば、スピリチュアルな参与的出来事によって、存在論的に豊かな宗教界が成立する——あるいは“明るみになる”——際の現実や神秘の創造的な展開に、人間の全領域の認識能力 (例、合理的、想像的、身体的、生命的、美的、等) を関与させることができるのである。つまり、参与的アプローチでは、スピリチュアルな現象、体験、洞察は共創造的な出来事として見なされ、聖なるものはエナクティブに理解される⁵⁾。スピリチュアルな知の創発を、人間の多次元的な認知、文化的文脈、神秘の創造的な力の相互作用に位置づけることで、非宗教的なモダニストやポストモダニストが、宗教を文化一言語的産物に還元してしまうことや、後述する通り、狂信家が独断で、一つの伝統を模倣として扱い特権を与えてしまうといったことを回避できるのである。

この節の残りでは、スピリチュアルな共創造、

創造的スピリチュアリティ、スピリチュアルな個性化、参与的多元主義、緩やかなスピリチュアリティの普遍主義、参与的認識論、統合的な菩薩の誓願、参与的スピリチュアリティの実践という、参与的アプローチを代表する8つの特徴について説明する。

スピリチュアルな共創造の次元

スピリチュアルな共創造には、個人内、個人間、超個人という3つの次元が含まれる⁶。後述する通り、それぞれの次元において、身体化（内のスピリット：spirit within）、関係的（間のスピリット：spirit in-between）、エナクティブ（超越のスピリット：spirit beyond）といった形で、参与的なスピリチュアリティが生み出される。

「個人内の共創造（intrapersonal cocreation）」は、人間の全ての特質——身体、生命エネルギー（vital energy）、ハート、マインド、意識——が、スピリチュアルな現象のエナクトメントに共同的に参加することで成立する。この次元は、ある人間の特質が、他の特質と比べて本質的に優れているのでも、より進化しているのでもないという「等優位性の原則（principle of equiprimacy）」に根差している。Romero & Albareda（2001）が指摘するように、西洋の認知主義的（例、マインド中心）性格によって、精神以外の特質の成熟は妨げられている。そのため、主流の教育でマインドが到達するのと同じレベルにまで押し上げられるような実践に、これらの特質を関与させる必要がある（Ferrer, 2003 中川監訳 2010; Ferrer, Romero, & Albareda, 2005 中川監訳 2010 も参照）。しかし、原理的には、人間の全特質は平等なパートナーとして、スピリチュアルな道程の創造的展開に参加することができる。そして、ここ地球では、スピリットの生命に対して同じだけの責任を自由に負うことができるのだが、同時にまた、スピリット

から等しく疎外されてもいる。個人内共創造では、「内のスピリット」（神秘の内在的次元）に根差すことが重要視され、参与的なスピリチュアリティは、本質的に「身体化」という特徴をもつ（Ferrer, 2006, 2008a 中川・吉嶋訳 2012; Heron, 2006, 2007）。

「個人間の共創造（interpersonal cocreation）」は、結束、相互尊重、建設的な対立の精神をもった仲間として成長する人々に見られる、協同的な関係性から創発する（Ferrer, 2003; Heron, 1998, 2006）。それは、「等潜在性の原則（principle of equipotentiality）」に根差したものである。この考えに従えば、我々は様々な点で、他者に対して優れていたり、また劣っていたりするものであり、その意味で「我々は皆教師であり学生である」（Bauwens, 2007; Ferrer, Albareda, & Romero, 2004）。とは言え、この原則は、スピリチュアルな教師やメンターに従事することに意味がないというのではない。そうではなく、人間は、人類全体の中でランク付けされたり、知力、情動知性、観想的認識など単一の発達の基準に従ってランク付けされたりすることはできないということを主張しているだけである。また、スピリチュアルな成長にとって、仲間同士の人間関係は重要であるが、個人間の共創造には、精神や物質界あるいは宇宙に埋め込まれた微細な存在や自然の力、元型的な力のような、知覚された人間以外の知性（nonhuman intelligence）との接触も含まれる（例、Heron, 1998, 2006; Jung, 2009 河合監訳 2010; Rachel, 2010）。個人間の共創造では、「間のスピリット」（例、神秘の状況的次元）と交わることが重要視され、参与的なスピリチュアリティは、本質的に「関係性」という特徴をもつ（例えば、Heron, 1998, 2006; Heron & Lahood, 2008; Lahood, 2010a, 2010b; Osterhold, Husserl, & Nicol, 2007 中川監訳 2010）。

「超個人の共創造 (transpersonal cocreation)」とは、スピリチュアルな洞察、実践、状態、世界を生み出す中で生じる、身体化された人間と神秘との間のダイナミックな相互作用のことを指す (Ferrer, 2002, 2008b)。この次元は、「等多元性の原則 (principle of equiplurality)」に根差している⁷。この考えでは、それぞれが同じようにホリスティックで解放的な、スピリチュアリティのエナクトメントが多元的に存在する「可能性」がある⁸。この原則によって参与的スピリチュアリティは、単一のスピリチュアルなシステムに独断的にコミットメントすることから解放され、形而上学的かつ実用主義的な基盤をもつ、真のスピリチュアルな多元主義への道を開くのである。超個人の共創造では、「超越のスピリット」(例、神秘の超越的次元)へ開かれることが重要視され、参与的スピリチュアリティは、本質的に探究主導 (Heron, 1998, 2001, 2006) であり、「エナクティブ」な特徴をもつ (Ferrer, 2000b, 2001, 2002, 2008b)。

これら3つの次元はすべて、スピリチュアルな出来事をエナクトメントする際、多面的に相互作用するが、個人内の共創造と超個人の共創造の間に生じる、創造的な関連性は特筆に値する。マインドと意識は、微細で、超越的なスピリチュアリティの形態への自然な架け橋となる機能を持っていると言えるだろう。こうしたスピリチュアリティの形態は、より固定された形式やダイナミクスを示す、歴史上既にエナクトメントされたものである (例えば、宇宙論的モチーフ、元型的布置、神秘的ヴィジョンや状態など)。その一方で、身体や生命エネルギーに注意を向けることで、生命やスピリットに内在する更なる生成的な力に、より多く接触することができるのである (Ferrer, 2002, 2003 中川監訳 2010, 2008a 中川・吉嶋訳 2012; Ferrer &

Sherman, 2008b)。もし我々がこうしたアプローチを受け入れるのであれば、宗教的な探究の中で、身体化された次元に参与すればするほど、その人のスピリチュアルな生はよりますます創造的になり、より多くの創造的なスピリチュアルな発達が立ち現われることになるだろう。

創造的なスピリチュアリティ

1990年代、参与的スピリチュアリティの揺籃期には、伝統宗教から継承されたに違いない一定の制約の中で、スピリチュアルな探究が行われていた。Eliade (1982) が論じたように、既成宗教の実践や儀式は、宇宙創成上の行為や出来事を繰り返そうとする「再演的 (re-entative)」なものである。筆者はこれを敷衍し、多くの宗教的伝統は、「複製的 (reproductive)」に見受けられることを主張した。それは、宗教的伝統の実践が、儀式に従って神秘的原動力を再演するだけでなく、教祖の悟りを複写し、十分な証拠も無いまま啓示聖典で伝えられる、救済や自由の状態に到達することを目指すに留まっているからである (Ferrer, 2002, 2006, 2008a 中川・吉嶋訳 2012)。こうした救済や自由の状態の実際の姿や、こうした状態を得るために、無数に開発されてきた宗教観念や宗教的实践——本来は伝統の中で、豊かで創造的な発達に導くためのものである——のうち、効果的な方法に関しては、多くの論争がある。それにもかかわらず、スピリチュアルな探究は、そうした所与の明白な目標によって制御された (また、おそらく妨げられた) のである。その一方で、Heron (1998) は、伝統的な教義体系内の経験的な訓練と、個人や協同で行われる、真に経験的なスピリチュアルな探究とを区別した。

参与的エナクトメントには、スピリチュアルな取組に関するあるモデルが内含される。それは、過去の通りに予め決められた、一定の比喩

を単に複製するのではなく、新しい経験や、現実やスピリットの創造性へと開かれる冒険への旅立ちなのである（Ferrer, 2002, 2008b; Ferrer & Sherman, 2008b; Heron, 1998）。例えば、現在の倫理的直観や認知能力に根差すことで、参与的なスピリチュアルな探究は、以前の宗教形態を批判的に修正したり、現実化したりするだけでなく、新たなスピリチュアルな見解、実践、拡張された自由の状態さえ共創造することができるのである（Ferrer, 2008b, 2011b を参照）。

スピリチュアルな個性化

創造性を強調することは、「スピリチュアルな個性化（spiritual individuation）」、すなわちある人が、独自のスピリチュアルなアイデンティティや全体性を次第に発展させ具現化するプロセスにとって重要である。宗教的伝統は、実践者の内的生活や外的生活の本質的特徴を、一層均質化してしまう傾向がある。その一例として、同様のスピリチュアルな状態や解放、キリストや仏陀のようになること、同じ服装（僧の場合）を、実践者に奨めることなどが挙げられる。過去にはこうした要求が適切であったかもしれないが、近代的自己の出現によって（Taylor, 1989 下川・桜井・田中訳 2010）、我々が陥っている状況（少なくとも西洋）では、スピリチュアルな成熟と心理的個性化の大胆な統合が必要とされているのではないだろうか。それは、より豊かな多様性をもったスピリチュアリティの表出を導いてくれるにふさわしいものと言える（Ferrer, 2010, 2011b）。換言すれば、参与的アプローチが目指すのは、スピリチュアルに差異化した個人によって構成されるコミュニティの出現なのである。

ここで、近代的な、過度に個別化された精神的自我と、スピリチュアルな個性化の聖火によって生み出された参与的自己とを区別するこ

とが重要である。身体から切り離された近代的自己は、孤立、分離、自己愛に苦しむ一方で、スピリチュアルに個別化した人のアイデンティティは、身体化、統合、つながり、浸透性といった特徴をもつ。そうした人々は、決して孤立しているのではなく、高度に差異化していることによって、他者、物質界、多次元的な宇宙との、深い意識的な交流に入っていくことができる。従って、近代的個人主義とスピリチュアルな個性化の間には、後者が徹底した関係性の統合を目指すという点で、重要な違いがある。同様に、Almaas（1988, 1996）は、自律性と関係性を統合した完全な個人と、近代的個人主義の自己愛的自我を区別している。

参与的多元主義

参与的アプローチでは、スピリチュアリティに対する多元的なヴィジョンが採用される。すなわち、宗教現象を象る文脈的要因や言語的要因の役割を受け入れると同時に、宗教的体験や宗教的意味を発展させたり、スピリチュアルな世界の存在論的価値や創造的な影響を確かなものにしたたりする、様々な非言語的要素（例えば、身体性、想像性、エネルギー性、元型等）の重要性を認めるのである。

また、参与的多元主義によって、スピリチュアルな道程だけでなく、スピリチュアルな解放や、スピリチュアルな究極点さえ多様であるという構想が可能になる。第一に、多様なスピリチュアルな目的地や「救済」が歴史的に存在したことを認めるが（Ferrer, 2002; Hein, 1995）、これに加え、参与的アプローチを通して促進される内在的なスピリチュアルな生や、内のスピリット、間のスピリットに、身体化を伴った形で増々開かれていくと、新しいホリスティックなスピリチュアリティが実現することになるかもしれない。こうしたスピリチュアリティは、伝統的

な悟りや解放の状態に還元することはできないものである。もし人間を、神秘が身体化された真に「唯一無二の存在」と見なすのであれば、どこかで重複する可能性があったり、互いに協調したりするにしても、スピリチュアルに個性化するにつれ、スピリチュアリティは全く異なった形で実現すると考えられはしないだろうか。

第二に、参与的多元主義では、ダイナミックで未知なる神秘、スピリチュアルな力、かつ／あるいは生命や現実の生成的な力へと、意図的に、もしくは無意識のうちに参与することを通して、スピリチュアルな究極点が様々なエナクトメントされ得ることが主張される⁹。参与的視点は、二、三の、あるいは限られた所与のスピリチュアルな究極が存在するというを主張するのではない。むしろ、神秘かつ／あるいは宇宙がもつ根本的な開放性や相互関連性、創造性によって、究極的に自己開示した現実や宗教界を無限に、参与的に共創造することができる。すなわち、参与的アプローチでは、無数のスピリチュアルな花を咲かせるような創造的なスピリチュアリティを実現させるために、身体、マインド、感情、意識をはたらかせるのである。

より緩やかなスピリチュアリティの普遍主義

参与的アプローチがもつ多元性という本質によって、「より緩やかな」スピリチュアリティの普遍主義という特徴が失われるべきではない。参与的アプローチでは、いくつかのスピリチュアルな究極を同一のものとみなすような疑わしいことはせず（例えば、タオとは神である、仏教的な空はヒンドゥー教のブラフマンと構造上は同一である等）、未知の神秘や創造的なスピリチュアルな力を、全てのスピリチュアルなエナクトメントを生成する源として支持する（Ferrer, 2002, 2008b）。この、共通のスピリチュアルなダイナミズムは、不可解な性質を与えて

しまうカント派のヌメノンや「物自体 (thing-in-itself)」とは区別される。また、いつも不完全で、文化的に条件付けられ、認知の働きに抑え込まれてしまうような、現象的顕現とも区別される（例えば、Hick, 1992）。対照的に、参与的アプローチのエナクティブな認識論では、次のような考えによって、カント派の「二つの世界 (two worlds)」のような二元論を否定する。すなわち、神秘には、具象化された所与の属性（個人、非人格、二元的、非二元的）が備わっているとは考えず、スピリチュアルな究極や神秘の根本的な特性とは、多様なものの集合体であると考えられる。たとえ、前者が後者の存在論的可能性を排除しなかったとしてもである。端的に述べるとすれば、神秘とは、多様な存在論的方向性のもと展開していくのである。

さらに、多元主義と普遍主義の関係性を、序列を伴った形で一様に特徴付けることはできない。なぜなら、普遍主義と多元主義の両方に、「より低次の」形態や「より高次の」形態が存在する一方で（例えば、多かれ少なかれ柔軟でない、洗練された、包含的な、説明的等）、「普遍主義と多元主義の弁証法的展開、一対多の弁証法的展開というのは、神秘の自己開示に関する最も深遠なダイナミクスを意味するかもしれないのである」（Ferrer, 2002, p. 191）。同様に、Puhakka (2008) は、トランスパーソナル談話の歴史的進化という文脈において、「調和性と多様性」(p. 8) の間の弁証法的展開に関する重要な考察を行っているが、筆者は完全にこれに同意する。

参与的認識論と批判的理論

より緩やかなスピリチュアリティの普遍主義という考えがあるとはいえ、参与的多元主義が、生命に関する従来の宗教的理解や形態の全てを、全面的に、あるいは相対主義的に支持し

ているのではない。つまり、参与的アプローチが、具象化された所与のスピリチュアルな究極を拒絶しても、スピリチュアルな事柄を質的に差異化することを避けているわけではない。確かに、非結晶質の粘土から生成された美しい磁器製品のように、(到達可能な、あるいは不可能な)元のひな形がどれだけ正確に表象されたかに応じて、文化を質的にランク付けることは不可能だろう。それでも我々は、心を揺さぶり、巧みで、洗練された生成物を見分けることはできるのである。

参与的転回によれば、スピリチュアルな洞察に関する先験的な教義や既成の階層化に応じて、様々な伝統を質的に差異化できるという前提は成り立たなくなる。一方で、この比較の立脚点は、多様な実践の成果（実存的、認知的、感情的、対人関係的）を通して探究される。特に筆者は、二つの基礎的なガイドラインを提唱してきた。まず、自我中心性テスト (egocentrism test) である。これは、スピリチュアルな伝統、教え、実践が、実践者を、粗大な形や微細な形の自己愛や自己中心性から解放する程度を測定するものである。次に、解離性テスト (dissociation test) である。これは、スピリチュアルな伝統、教え、実践が、個人の有する全ての次元を統合的に開花させる助けとなった程度を評価するものである (Ferrer, 2002, 2008b)。また、宗教の名の下で、多くの虐待や弾圧が行われ続けていることを考えると、環境 - 社会 - 政治性テスト (eco-social-political test) を追加してもよいだろう。これは、スピリチュアルなシステムが、環境的バランス、社会的・経済的正義、宗教的・政治的自由、階級・性の平等、他の基本的人権をどの程度促進したかを査定するものである (Heron, 2006 を参照)¹⁰。

このガイドラインには、二つの重要な条件が必要となる。第一に、スピリチュアルな道程や

解放によって、適切な心理学的性質や文化的性質は異なることがあるが（発達時期によって同じ人物でも適切な性質が異なるのと同様に）、これによって、そうした性質が例外なく優れたもの、あるいは劣ったものになるわけではない。この点に関しては、よく知られたヒンドゥー教の四住期（学生期、家住期、林住期、遊行期）がすぐに頭に浮かぶし、他の文化において見いだすことのできるスピリチュアルな類型論も同様である（例えば、Smith, 1994）。第二に、参与的アプローチでは、自己愛や自己中心性の超克を強調する。これは、ほとんどのスピリチュアルな伝統にとって中心的な事柄であるにもかかわらず、全ての伝統で共有されることはないだろう。より辛辣な批判をすれば、ほとんどの宗教は、解離性テストや環境 - 社会 - 政治性テストという観点では、それほど上位に位置づけられないだろう。例えば、人間の身体や生命 / 性エネルギーに対する、粗大あるいは微細な抑圧、コントロール、厳格な規制（対して、これらの自律的成熟、統合、スピリチュアルな知への参与）は、これまでの観想的取組みにおいて、むしろ一般的に行われてきた (Ferrer, 2008b)。また、多くの宗教はこれまで、ネガティブな環境影響となったことは間違いないし（例えば Nelson, 1998）、暴力、軍国主義、権威主義的体制を支持してきた（例えば、Juergensmeyer, 2000 吉賀・櫻井訳 2003; Victoria, 2006）。また、多くの宗教は、人権を守るための重要な資源を提供してきた一方で（例えば、Banchoff & Wuthnow, 2011）、深刻な人権侵害をもたらしたという面もある（例えば、Ghanea, 2010）。よって、参与的転回のもつ統合的で社会参加的な推進力は、宗教への参与的批判理論の発展に不可欠なものなのである。

より肯定的に言えば、自我中心性テストや解離性テストが基準として定める指針は、社会的責任のある「統合的な無私無欲 (integrated

selflessness)」という普遍的な理想である。それは、Habermas (1984) の「理想的言論の状況」のように、調節的原則としての役割を担うことができる。従って統合的な無私無欲という考えにより、スピリチュアルな問題における批判的判断力に、手続き的基準がもたらされる。すなわちそれは、スピリチュアルな談話の質的差異化をどのように行うかに関するものである。そしてこうした評価上の原則から、スピリチュアルな選択や実践を査定するための適切な基準やルール、テストが得られることになる。自己評定やピア評定（例えば Heron, 1996, 1998）に加えて、自己愛人格目録（NPI: Narcissistic Personality Inventory, Raskin & Terry, 1988）といった標準化された尺度の使用も考えられるだろう。また、例えば、身体的知能や身体的自覚に関する尺度（例えば、Anderson, 2006）と共に、超越性に関する尺度（例えば、Akyalcin, Greenway, & Milne, 2008; Friedman, 1983）を用いるなど、熟考の末、他の尺度を併用することによっても、スピリチュアルな状態に関する心身統合の度合いを把握できるかもしれない。

要約すると、参与的アプローチのエナクティブな認識論では、スピリチュアルな道程を、自己中心性の超克と完全に身体化された統合性の習熟度によって調べる。この二つの側面によって、他者、自然、世界が求めているものに対して敏感になるだけではなく、文脈や、我々の生命やスピリットが求めているものが何であれ、文化や惑星がより効果的に変容するための媒介になることができるのである。

統合的菩薩

多くの人にとって意識的なマインドは、アイデンティティ感覚の中枢である。そのため、完全に自由であると自ら信じることは、意識の完全な解放といっても、それは欺瞞

になりかねない。実際は、そう信じていても、我々の本質的次元は発展途上で、孤立し、束縛——非常に多くの現代のスピリチュアルな教師によって証明された非機能的な性行動（例えば、Bulter, 1990; Kripal, 2002）等——されている場合がある。先に述べたように、参与的スピリチュアリティでは、人間の全特質が緊張や分離することなく、スピリチュアルな道程に調和的に関与することが求められる。Aurobindo (2001) は、セクシュアリティや生命世界（the vital world）がもつスピリチュアルな重要性を軽視したものの、次の点では正しかったと言える。それは、意識「の中で」生じる意識の解放は、人間の全ての次元がスピリチュアルに協力することが求められる統合的な変容と同じではない、ということである（Aurobindo, 2001, pp. 942ff）。

筆者は、こうした問題を念頭に置きながら「統合的な菩薩の誓願」を提案してきた。それは、身体、ハート、原初の世界（the primary world）が、ここ地球で神秘の生命を共に展開させるのを妨害する疎外傾向から自由になるまで、意識的なマインドも自らの完全な解放を放棄する、というものである（Ferrer, 2006, 2008a 中川・吉嶋訳 2012, 2011b）。当然ながら、「統合的な菩薩の誓願」を取り入れたからと言って、初期仏教に対する個人主義的なスピリチュアリティの願望を呼び起こすわけではない。なぜならそれは、意識的なマインドや慣習的なアイデンティティ感覚のみではなく、一切衆生の「統合的な」解放への関与を必要とするからである。同じく、先に述べたかったのは、「菩薩」という単語を用いても、それが、身体感覚や欲望の消滅、輪廻転生からの解脱として語られる、初期仏教の解放を支持するわけではない、ということである（Collins, 1998; Harvey, 1995; Ferrer, 2011b を参照）。

参与的スピリチュアリティの実践

多くの伝統的なスピリチュアルな技術や価値（例えばマインドフルネス、慈悲、無条件の愛）に加え、参与的スピリチュアリティの実践によって、スピリチュアルな共創造における、身体化の次元、関係性の次元、エナクティブな次元が向上する。また、いくつかの伝統的実践、現代風に伝統的実践を改正したもの、多くの革新的なスピリチュアリティの発展においても、こうした強調が見てとれるため、以下にその例を示す。いくつかの伝統的実践（例えば、カバラの実践、観想的実践、先住民の実践、秘教的実践など）は、多くの点で参与的であるが（Ferrer & Sherman, 2008a; Lahood, 2007a）、それらを現代的に（再）表出したものにおいて、よりはっきり、より強固に、参与的価値が肯定されることが分かる。こうした文脈の中に、仏教瞑想の身体化再構成（Ray, 2008）、仏教修行の関係性への拡張（Rothberg, 2006, 2008）、パタンジャリ・ヨーガの統合的評価（Whicher, 1999）、キリスト教の祈りにおける身体とセクシュアリティの関与（Schroeder, 1994; Vennard, 1998）、その他多数が位置づけられる。

加えて、過去数十年は、新たな参与的スピリチュアリティの実践が立ち現れた時期であった。例えば、相互的観想（Ferrer, 2003を参照）、協同的なスピリチュアリティの探究（Heron, 1998, 2006）、筆者自身による身体を通したスピリチュアルな探究（Embodied Spiritual Inquiry: ESI; Osterhold, Huserl, & Nicol, 2007 中川監訳 2010）があり、ESIは最近、統合やスピリチュアルな体験を助長する効果的な方法であると提言された（Bailey & Arthur, 2011）。重要な参与的要素をもつその他の実践体系としては、ホロトピック・ブレスワーク（Grof & Grof, 1990 安藤・吉田訳 1997）、ダイヤモンド・アプロー

チ（Almaas, 2002）、フェミニストや女性のスピリチュアリティのアプローチ（Eller, 1993; King, 1992）、現代的な形態の薬物によるスピリチュアリティの探究（例えば Bache, 2000; Ball, 2008）、シュリ・オーロピンドのインテグラル・ヨーガ（Mukherjee, 2003）、現代のソマティック・アプローチ（例えば Johnson, 1995）、スピリチュアリティへの関係的アプローチ（例えば, Achterberg & Rothberg, 1998; Bawens, 2007; Lahood, 2010a; Welwood, 2000）、スピリチュアルな道程としてのセクシュアリティの現代的取り組み（例えば Bonheim, 1997; Wade, 2004）などがある。以上のように、参与的スピリチュアリティの概要が明らかになったところで、トランスパーソナル学領域における参与的アプローチの理解へと、議論を進めていきたい。

参与的アプローチ：モデル、方向性、パラダイムあるいは画期的出来事？

これまでトランスパーソナル学者は、参与的アプローチを主に3つの観点から理解してきた。それは、学術的モデル、理論的方向性や理論的視座、そしてパラダイムや画期的出来事である。この節では、それぞれの事柄について端的に論じる。

学術的モデル

この参与的アプローチは、トランスパーソナル心理学領域における理論的モデルとして考えられている。例えば、『シャドー、セルフ、スピリット（Shadow, Self, Spirit）』というすばらしい著書の中で、Daniels（2005）は、マズローのメタ欲求理論、ユングの分析心理学、アサジョーリのサイコシンセシス、グロフのホロトピック・モデル、シュリ・オーロピンドの統合心理学、ウィルバーの構造-階層モデル、ウォシュバーンの螺旋-力動モデル、ライトのフェ

ミニスト理論と並んで、参与的アプローチを当該領域における主要理論やモデルの一つに含んでいる。Daniels (2005) はこうしたモデルの主要な相違点（例えば、内在、超越、自己といった事柄等）について論じた後、シュリ・オーロビンドのモデル、螺旋-力動モデル、参与的モデルが、完全に身体化され統合されたスピリチュアリティを肯定していることに収斂される点を強調し、これら3つのモデルに同調している。その他、Almendro (2004)、King (2009)、Péter (2009)、Friedman, Krippner, Riebel, & Johnson (2010) といった研究者が、トランスパーソナルのモデルやスピリチュアルなモデルとして参与的アプローチに言及している。

理論的方向性

さらに、参与的アプローチは、心理学分野の境界線を超え、トランスパーソナル領域の広範において機能し (Walsh & Vaughan, 1993)、学際的なトランスパーソナルの方向性であり (Boucoulalas, 1999)、トランスパーソナル学の境界さえ超えてしまう (例えば、Ferrer & Sherman, 2008a; Lahood, 2007a)、より大きな理論的方向性や理論的視座として理解されている。こうした点から、Washburn (2003) は、トランスパーソナルの3つの主要な理論的方向性——構造-階層的方向性 (ウィルバー)、螺旋-力動的方向性 (ウォッシュバーン)、参与的方向性——を論じ、参与的アプローチが、他二つの理論による、唯一の完全なスピリチュアリティの真実に関する主張に挑戦するものであるとしている¹¹。Washburn (2003) は、フェミニストやエコロジカルなアプローチについても論じているが、それらは「探究を導く理論的方向性という観点よりも、探究の特定の面 (女性のスピリチュアリティ、自然の神聖さ) への焦点化という観点から定義される」(p. 3) 視座であると述べている。フェミニズムとエコロジー

は、構造的方向性、力動的方向性、参与的方向性それぞれの支持者によって、等しく応用されるアプローチと見なすこともできるだろう。

同様に、Goddard (2005, 2009) は、この領域の3つの主要な理論的方向性として、ネオ・ペレニアリズム (ウィルバー)、新ユング派 (ウォッシュバーン)、多元-参与 (タルナス、フェレル) を挙げており、これは Washburn (2003) によるカテゴリー分けとほぼ対応している。一方、Washburn (2003) とは対照的に、Goddard (2005, 2009) は、フェミニスト的視座、エコロジー的視座、呪術的視座を参与的方向性に含めている。Goddard (2005, 2009) は、後述する宇宙-原型的統合モデルの発展を通して、こうした方向性の相違点を調和しようと試みている。

最後に、Cunningham (2011) は軸の一方の端をペレニアル哲学とし、もう片方を機会論的仮説、物質主義的仮説、還元主義的仮説に基づく実証科学的アプローチとすると、そのちょうど中央に参与的アプローチを位置づけられると論じている。

パラダイム、あるいはパラダイム上の画期的出来事

最後に、参与的アプローチは、一つのパラダイムや、パラダイム上の画期的出来事としても捉えられている。『再考』では、参与的アプローチは、トランスパーソナル研究やスピリチュアリティ研究における「参与的転回」——トランスパーソナル理論に広く行き渡っていた認識論的戦略 (内的実証主義) や存在論的仮定 (ペレニアリズム) と訣別する、パラダイム上の転換——として紹介された。『再考』の前書きで Tarnas (2002) は、パラダイムという点から、参与的アプローチについて力説している。すなわち、参与的アプローチは、マズローやグロフ

がトランスパーソナル心理学という学問を立ち上げたことで始まったパラダイム・シフトの、第二期概念的段階にあたるというのである。この点について、Tarnas (2002) は以下のように論じた。

マズローやグロフがトランスパーソナル心理学を立ち上げたことで、この領域の独立宣言が行われたとしたら、この本は、「自由の新しい誕生 (new birth of freedom)」を示す、解放宣言書として見なすことができるかもしれない。ここに、トランスパーソナル理論は、過去への抵当から解放されるのである。それは、トランスパーソナル理論自体の啓発や近代科学の源泉から受け継がれてしまった、抑圧的な仮定や原理からの解放である。(p. xv)

この他にも、参与的転回を概念的革命とした論者として、Kripal (2003)、Jaenke (2004)、Clarke (2004) などが挙げられる。

Tarnas (2002) の提案に基づいて、トランスパーソナル人類学者の Lahood (2007a) は、トランスパーソナル学の二つの転換について論じた。一つ目は、1960年代後半、トランスパーソナル心理学の誕生とともに生じたもので、「東西の心理学を統合する試み、意識の最端の見取り図を作製する試み、(略) 実用主義科学とスピリチュアルな事柄の結合」(p. 2) と定義される。Lahood (2007a) はこの転換を、宗教的普遍主義（あるいはペレニアリズム）へのコミットメントとして特徴付け、代表的な論者にマズロー、グロフ、ウィルバーを含めた。そして二つ目は、参与的転回である（タルナスやヘロン、フェレールの研究から、ラホーが実証している）。これは、トランスパーソナル心理学がペレニアリズムに固執することをやめ、トラ

ンスパーソナルな出来事的身體性の次元、関係的次元、多元的次元を強調することを意味するものである。

続いて Lahood (2008) は、この論を展開し、トランスパーソナル運動における、3つのパラダイム上の画期的出来事について論じた。一つ目の出来事は、1960年代から1970年代にみられる「前トランスパーソナル運動」や「サイケデリック革命」である。この時期には、東洋のスピリチュアリティと薬物による意識変容状態との混成が生じ、また、マズローやグロフによって形式化されたトランスパーソナル運動が最高潮のものとなった。二つ目の出来事は、1977年から1990年代中頃、ウィルバーが席卷した、「ネオ・ペレニアリズムの時代」である。これは、西洋と東洋の哲学、心理学、宗教を進化論的枠組みの中に統合する試みである。この枠組みは、普遍性を仮定された目的論的過程に応じて構築され、その究極的な目的を、統合的な非二元論性の実現に置いている。そして、三つ目の出来事が「参与的転回」である。これは、1990年代初頭に Tarnas (1991) が行ったグロフの意識研究の分析に端を発し、Heron (1992, 1998, 2006) や Ferrer (2002) の文献によって明確な形となった。Lahood (2008) は、トランスパーソナルのネオ・ペレニアリズムに取って代わる説得力ある見解を論じた者として、双方の名を挙げている。

参与的アプローチを、学術的モデルや理論的方向性、そして概念上の革命（あるいはパラダイム）とさえ考えるのは妥当であるように思えるが、画期的な主張と考えるには時期尚早であるというのが筆者の考えである。参与的アプローチが、以前までのトランスパーソナル理論の構築という点では、概念上の革命を示していると論じることと、トランスパーソナルな思考

における新たなパラダイムの時期が始まったと論じることは、全くの別物である。こうした可能性を真剣に検討する前に、参与的思考がトランスパーソナル学に実際に与えたインパクトを全般的に分析する必要があるだろう。次の節では、こうした影響の範囲を検討することから始める。

参与的転回のインパクト

哲学、宗教、人間科学における参与的視座は、『再考』出版以前にも見受けられ、筆者の研究が及ぼし得たいかなる影響も、このより大きな文脈の中で理解されるべきである¹²。まず、参与的アプローチのインパクトをレビューする前に、トランスパーソナル理論と参与的転回の相互包括的關係性について論じておくことは理解の助けになる。一方では、これまで見てきた通り、参与的アプローチは、トランスパーソナル学領域における理論的モデル、理論的方向性、パラダイムと見なすことができる。他方では、トランスパーソナル学は、参与的アプローチに影響を受けたその他の学問領域——人類学 (Lahood, 2007c)、先住民研究 (Bastien & Kremer, 2004; Marks, 2007)、比較神秘主義 (Ferrer & Sherman, 2008a; Freeman, 2007) ——の一つなのである。この節では、参与的視座の軌跡を、トランスパーソナル学、意識研究、インテグラル教育やホリスティック教育、宗教学という四つの知識体系においてたどっていく¹³。

トランスパーソナル学

近年、ますます多くのトランスパーソナル学者が、程度の差こそあれ、筆者の参与的アプローチの様々な側面に同調してきた。出版年順に引用すると、以下ようになる。Heron (1998, 2001, 2006)、Tarnas (2001, 2006)、Jaenke (2004)、Paulson (2004)、Daniels (2005)、O'Connor (2005)、

Heron (2006)、Hollick (2006)、Hartelius (2006)、Bauwens (2007)、Kremer (2007)、Lahood (2007b, 2007c)、Irwin (2008)、Kelly (2008)、Lancaster (2008)、Rothberg (2008)、そして Sherman (2008; Ferrer & Sherman, 2008b) 等である¹⁴。

概して、『再考』がよく評価されるのは、トランスパーソナル思想を、ウィルバーのネオ・ペレニアリズムからの拘束や、これと関連した、スピリチュアルな伝統、状態、方向性に対するランク付けによる評価 (例えば、Jaenke, 2004; Lahood, 2007b; Lancaster, 2004; Tarnas, 2001) から自由になっている点にある。それと同時に、スピリチュアルな成長や認識に、より身体化され、関係的で、多元的にアプローチする点も評価されている (例えば、Daniels, 2005, 2009; Heron, 2006; Lahood, 2008)。Lahood (2007a) が指摘するように、参与的アプローチでは、トランスパーソナルな現象を言い表すために、「出来事 (events)」「対「体験 (experiences)」という用語を用いるが、これは、多くのトランスパーソナル学者によって適用されている (例えば、Irwin, 2008; Kremer, 2007; Wade, 2004)。また、筆者のスピリチュアルな多様性への参与的アプローチや、実用主義的解放論的認識論も同様に、多くのトランスパーソナル研究において支持されている (例えば Friedman et al., 2010; Hollick, 2006; Lancaster, 2004)。

参与的思想は、ウィルバーとその共同研究者の著作や批判に対して、同様に影響を与えたことを契機に広まった。Wilber (2002) は、『再考』を「スピリチュアリティへのグリーン・ミーム的アプローチ」と擲諭し、早期に棄却したが、最近の研究 (Wilber, 2006 松永訳 2008) には、参与的アプローチの洞察や説明が多く含まれている。例えばダニエルズが示唆するように (Rowan, Daniels, Fontana, & Walley, 2009)、ス

スピリチュアルな道程のもつ共創造的な本質、参与という用語、スピリチュアリティの批判的談話における既知の事実に関する神話の使用などは、筆者が初期の研究（例えば Ferrer, 1998a, 2000a, 2000b, 2001, 2002）で述べた参与的アプローチの中心の特徴である。ウィルバーは参与的アプローチの諸側面をウィルバー派のインテグラル理論に取り入れてきたが、参与的視座から見るに、そこには多くの問題が残されている（Ferrer, 2011b を参照）。また、参与的着想を取り入れているインテグラル理論の研究者として、以下の二名が挙げられる。まず、McIntosh (2007) は、『再考』で論じたエナクティブ・アプローチや認識論的批判を用いて、ウィルバーのモデルに含まれるいくつかの問題点に反論するための、より多元的な「統合的現実の枠組み」を精緻化した。また、Ferendo (2007) は、ウィルバーのアプローチを補完するものとして、統合的实践（Ferrer, 2003）への参与的視座を提示した。

この節の残り部分で、筆者は3つの例を提示し、参与的視座が様々な方法でトランスパーソナル研究に携わってきていることを述べておく。一つ目は、賞を獲得した『一性の科学 (*The Science of Oneness*)』で、Hollick (2006) が、信頼性のある内的な知を生成するために、協同的探究 (Heron, 1996, 1998) の採用を提案したことである。そして Hollick (2006) は、ヘロンや筆者の参与的アプローチが、「現代精神に言及したスピリチュアリティの包括的でホリスティックな新しいモデル」(p. 345) の基礎を築くものであると、二章にわたって論じた。Hollick (2006) によれば、参与的スピリチュアリティによって、他のモデルに比べてスピリチュアリティの多様性を受け容れることができるだけでなく、Hollick (2006) 自身が現代において極めて重要だと考える、スピリチュアル

な道程の、身体性次元、倫理的次元、共創造次元、関係的次元、協同的次元を強調することができるという。Hollick (2006) は、「人間のスピリチュアリティのホリスティックなモデル」(p. 352) が創発したことで、次のようなことが可能になると結論付けている。

シャーマン、多神教、一神教、超越宗教といった様々な伝統の叡智を活用できるようになるだろう。また、信心深いもの、知的なもの、分離したもの、関与するもの、孤独なもの、社会的なもの、大衆的なもの、密教的なもの、超越的なもの、内在的なもの、その他のスピリチュアルな道程を受け容れられるようになるだろう。そして、我々のスピリットとの関係性に対する、協同的、参与的な視点を包含できるようになるのである。(pp. 352-353)

二つ目は、参与的世界観が、トランスパーソナル学、人類学、先住民研究、エコ心理学をはじめ、他の学問領域において出現していることを検証するために、Lahood (2007a) が、『レビジョン (*ReVision*)』誌の二巻にわたって特集を組んだことである。『参与的転回—パート1 & 2—』と題された『レビジョン』誌の論文では、筆者の研究が広く論じられているだけでなく、Tamas (2007)、Heron (2007)、Kremer (2007)、Abram (2007)、Lahood (2007b, 2007c)、Bauwens (2007)、Conner (2007)、Marks (2007) など、他の研究者によってもたらされた、参与的アプローチの重要な発展についても論じられている。

三つ目は、Daniels (2009) が重要な小論において主張したことである。それによれば、参与的視座は、よく知られた「上昇 (*ascending*)」(すなわち、“あの世”に向けた超越性が対象) や

「下降 (descending)」(すなわち、“この世”での内在性が対象)を超えた、トランスパーソナルな発達の第三のベクトル(ダニエルズはこれを「拡張 (extending)」と呼ぶ)を指し示すというのである。Daniels (2009)は、これまで「下降」を形作っていたものは、今や二つの根本的に異なる視点を融合する傾向にあると言う。その一つは、無意識的題材の探究や統合に焦点を当てる深層心理学的視点(例えば、ユング、ウォシュバーン、グロフ)であり、もう一つは、他者や世界とのスピリチュアルなつながりを強調する、関係的-参与的視点である。そして、「このような関係的思想や参与的思想は、先住民のスピリチュアリティ、フェミニストスピリチュアリティ(例えば、結合した自己)、トランスパーソナルなエコロジー(エコロジー中心主義)、関係的スピリチュアリティ、フェレール(例えば Ferrer, 2002)の参与的ヴィジョン(自己中心性からの解放、共創造的参与)などによって実証されている」(Daniels, 2009, p. 97)という。

Daniels (2009)は、「全ベクトル的」なトランスパーソナル理論や実践が重要であることを強く主張し、論を結んでいる。そして、いくつかのスピリチュアリティのモデルを調査した後、参与的アプローチとシュリ・オーロピンドのインテグラル・ヨーガが、3つのベクトル(超越、下降、拡張)全てにわたって等しく秀でた、スピリチュアリティの二つの方向性であると強調している。

この節の最後として筆者は、以下の関連領域において、参与的視座が存在感を高めていることを論じておく。そうした領域には、ゲシュタルト・トランスパーソナル療法(Williams, 2006)、サイコシンセシス(Faith, 2007; Palmer & Hubbard, 2009)、エニアグラム研究(Bailey & Arthur, 2011)、ユング派心理学(Ianiszekski,

2010)、イメージーション心理学(Voss, 2009)、エコ心理学(W. W. Adams, 2005)、作業科学(Collins, 2010)、スピリチュアルな成長への関係的アプローチやピアツーピア・アプローチ(Bauwens, 2007; Heron, 2006; Lahood, 2010a, 2010b)などが含まれる。

意識研究

特定の学術領域という点では、意識研究においても、参与的視座の貢献が見受けられる。2006年、『意識研究(*Journal of Consciousness Studies*)』誌の編集を務めるアンソニー・フリーマン(Freeman, A.)は、同誌に刺激的な小論を発表した。それによると、参与的アプローチでは、トランスパーソナル理論における微細なデカルト主義が批判されたが(Ferrer, 2002)、この観点から言えば、デネット(Dennett, D.)のヘテロ現象学(heterophenomenology: 一人称による経験報告に対する、不可知論的な三人称アプローチ)は、トランスパーソナル心理学にとって、最も一貫性があり、安定した方法論として歓迎されるべきである、という(Freeman, 2006)。以降、フリーマンの小論が契機となり、トランスパーソナル心理学の認識論的立場、トランスパーソナルな探究の本質、人間の意識研究に対する適切な方法といった事柄について、活発な議論が展開された。この議論の中心として、Tart (2006)、Adams (2006)、Hartelius (2006)による回答があるが、私見では、後者のものが、フリーマンの主張に対する返答として最も有効であるように思う(これに関連する重要な論文として、Walach & Runehov, 2010を参照)。

この比較的専門的な議論を総括するのは本論の範疇を超えているため、関心のある読者は原著にあたることをお勧めする。筆者のここでの唯一の目的は、参与的視座が意識研究のどの領域で見出されるかを論じることである。このよ

うな形で、参与的アプローチは、意識の本質（Lancaster, 2004）、意識の人類学に関する文脈（Lahood, 2007c, 2008）、エナクトメントに関する一般理論の重要な要素（Malkemus, 2011）といった研究においても議論されている。

インテグラル教育とホリスティック教育

インテグラル教育やホリスティック教育において、参与的転回が生じていることは否定できない。ギドリー（Moltz & Gidly, 2008）は、インテグラル理論やインテグラル教育への5つの主要なアプローチを、マクロ・インテグラル（macro-integral; ウィルバー）、メソ・インテグラル（meso-integral; ラズロー）、ミクロ・インテグラル（microintegral; シュタイナー）、参与的インテグラル（participatory-integral; フェレール）、横断的インテグラル（transversal-integral; ニクレスク、モラン）と命名した。インテグラル教育に対する参与的アプローチはまず、教育学的ヴィジョンを提示した共著論文（Ferrer, Romero, & Albareda, 2005 中川監訳 2010）において紹介された。それは、人間の全ての次元（身体、ハート、生命エネルギー、マインド、意識）が、生命やスピリットの生成的な力と相互作用しながら、学習過程の全段階で共創的に参与すべきである、というものだった。

この2005年の最初の論文を皮切りに、参与的アプローチが学術領域で急速に広がった¹⁵。

例えば Subbiondo (2010) は、参与的アプローチを基に筆者が設計した教育課程を引用し、インテグラル教育の10大原則をまとめた。また、参与的インテグラル教育は、カリフォルニア大学ロサンゼルス校の『高等教育におけるスピリチュアリティに関するニューズレター（*Spirituality in Higher Education Newsletter*）』（HERI プロジェクト・スタッフ, 2005）、観想

教育と学生中心教育の統合に関する高等教育行政の重要論文（Seitz, 2009）、最近では、神秘主義に関する大学教育の論集（Ferrer, 2011a）などで取りあげられた。さらに、ホリスティック教育の指導的権威である Miller (2006) が、自身の教育哲学である「時を超えた学び（timeless learning）」の中心的要素の一つに「参与」を含み、『再考』で提案した「より緩やかなスピリチュアリティの普遍主義」を、根本的なスピリチュアリティの枠組みとして適用している。

参与的思想が全面的にインテグラル教育に取り入れられるのに加えて、身体化されたスピリチュアリティの探究（Embodied Spiritual Inquiry: ESI）も、参与的インテグラル教育の原則を実践するための教育方法として、注目を集めつつある。この文脈では、ESIの学習者は、多次元的な体験（すなわち、身体的体験、生命的体験、感情的体験、知的体験、観想的体験）から知識を協同的に構成することを学ぶ。ESIの学習者は、協同的探究のパラダイム（Heron, 1996）という文脈の中で、アルバレダとロメロの身体化瞑想（Ferrer, 2003 中川監訳 2010 を参照）を用いて、参加者自身によって選択された問いを共に探究する。これに関するより多くの情報として、Osterhold, Husserl, & Nicol (2007 中川監訳 2010) による事例研究を参照されたい。この研究の中で、ESIの教育的アプローチ、認識論、研究過程、探究結果が紹介されている。また、ESIは、立命館大学で行われた参与的アプローチの発表（Ferrer, 2009b）に基づいて編集された、『インテグラル・アプローチ—統合的・変容的探究』（中川・松田, 2010）という論集においても、焦点が当てられている。

宗教学

参与的転回は、宗教学領域でもますます注目を集めている。執筆の目的に合致し、『再考』

は宗教学の雑誌でレビューされた（例えば G. Adams, 2003; Fuller, 2002; Parsons, 2003）。加えて、宗教学者の Kripal (2003) は、著書の主要な論点を支持する一方で、ある危険性が孕まれていることを警告した。すなわち、歴史的にみて、怪しげな「倫理的ペレニアリズム」（すなわち、神秘主義における倫理面の収束に関する、根拠の無い前提）が、参与的ヴィジョンを潜り抜けるかもしれない、というのである¹⁶。Kripal (2006) は、神秘主義に関するその後の論文で、体験主義（すなわち、スピリチュアルな現象を、個人内の体験に還元してしまうこと）に対する参与的アプローチの批判を強調し、内的体験の超越を含むが、それだけではない「参与的出来事」という観点から、神秘的なものについて語ることを強く提案した。同じく神秘主義という文脈では、Freeman (2007) が、本質主義者と構成主義者の長きにわたる難局を解決する中道として、参与的アプローチが効果的であることを論じた。また、Left (2003) は、エナクトメントされたスピリチュアリティの陸地という考えを支持しつつ、参与的アプローチによって、「ユダヤ神秘主義の伝統を再考した [レフト自身による] 類似の試みに対する、新しい評価の枠組みが与えられる」(p. 344) ことを指摘した。

現代の宗教学に明確な焦点をあてた『参与的転回 (*The Participatory Turn*)』(Ferrer & Sherman, 2008a) が出版されてからというもの、宗教学における参与的視座への関心が高まっている。論集に掲載された小論——スーフイズム (Chittick, 2008)、カバラー (Lancaster, 2008)、キリスト教 (Barnhart, 2008; Lanzetta, 2008)、ヒンドゥー教 (McDermott, 2008)、社会参加する仏教 (Rothberg, 2008)、ベルグソン派生氣論 (Barnard, 2008)、西洋の秘教 (Irwin, 2008) など、参与的アプローチの様々な立場が関与した——に加え、『ティクン (*Tikkun*)』(Gleig &

Boeving, 2009)、『ネットワーク・レビュー：科学と医療のネットワーク (*Network Review: Journal of the Scientific and Medical Network*)』(Clarke, 2009)、『トランスパーソナル心理学 (*Journal of Transpersonal Psychology*)』(Chalquist, 2009)、『復興 (*Resurgence*)』(Reason, 2009)、『ソフィア (*Sophia*)』(Goldberg, 2010)、『現代宗教 (*Journal of Contemporary Religion*)』(G. Adams, 2011)、『スピリトゥス：キリスト教スピリチュアリティ (*Spiritus: A Journal of Christian Spirituality*)』(Gleig, 2011a)、『オルタナティブなスピリチュアリティと宗教のレビュー (*Alternative Spirituality and Religion Review*)』(Gleig, 2011b)、『宗教研究レビュー (*Religious Studies Review*)』(Prabhu, 印刷中) などの雑誌において、著書のレビューがすぐに行われた。

その他にも、興味深い出来事が続いている。アメリカ宗教学会 (AAR) の 2010 年大会で、好評を博した『参与的転回』に関するワイルドカード・セッション (Gleig, Ferrer, Sherman, Barnard, Lanzetta, Irwin, & Kripal 2010) が実施され、同学会の 2011 年大会では、参与的視座からの観想的研究に関する二度目のパネル・セッションが実施された (Grace, Sherman, Ferrer, Malkemus, Klein, & Lanzetta, 2011)。また、Kripal (2010) は、心霊現象の神秘的次元に関する近年の研究で、「超常現象が生じて、それを完全な状態にし、意味を得るための [略] 積極的な関与に負うところが大きい」(p. 269) という点で、超常現象が本質的に参与的であることを論じた。最後に、比較的最近出版されたにもかかわらず、その論集は、Haar Farris (2010) や Cabot (2011) の博士論文、Gleig (2012) による宗教の新動向に関する調査においても、重要な論点となり、方法的枠組みを提供している。

先の疑問に立ち返ると、参与的アプローチが

トランスパーソナル学や関連領域で注目を集めていることは間違いないが、トランスパーソナル学領域におけるパラダイム上の出来事であると考えるのは時期尚早であろう。参与的思想の影響を受けたトランスパーソナル分野の著者の数は増加しているが、今日のトランスパーソナル学は、それと同等か、あるいはそれ以上の影響をもつ、その他多くの理論的方向性が存在する豊かな多元的領域である（例えば、Caplan, Hartelius, & Rardin, 2003; Cunningham, 2007, 2011; Daniels, 2005; Rothberg & Kelly, 1998）。

批判的視点

参与的転回を受け容れ、適用する研究者を中心に、参与的転回の発展をレビューしてきたが、ここからは、筆者自身の研究に対する主な批判について考察したい。その批判は、ウィルバー派インテグラル、元型、参与的アプローチという3つの領域に分類できる。

ウィルバー派インテグラルからの批判

ウィルバー派インテグラル研究の擁護者より、『再考』に対する二つの批判的的回答が提起されたが、そのうち一人（Paulson, 2002, 2003, 2004）は、自らの批判を撤回した。まず、Paulson（2002）は、『再考』のいかなる価値も、ウィルバーが既に述べたことであると主張し、ウィルバーの私信を引きながら、残りは「ポストモダンによる過ちの転換30年分を凝縮したもの」（段落43）と指摘した。しかし翌年、Paulson（2003）はこうした見方を撤回し、次のように述べている。

最初にこの著書に目を通した際は嫌悪感を抱いたが、それから二年間、著書を読み、研究したところ、トランスパーソナル心理学について書かれた最高の著書の一つであ

ることが分かった [略] この著書は、ウォッシュバーンやウィルバーの副産物などではなく、明らかに違う何かだ。（段落1）

それ以降、Paulson（2004）は、次のような見解に見られるように、参与的アプローチの立場により移行しているようである。「ウィルバーのインテグラル哲学は [略] 既成のシステムであり、個人が生きた体験を通して生に参与することで共に発展していくものとは違う。インテグラル哲学は、参与的統合哲学には及ばない」（p. 140）。

そして、第二の批判的的回答は、ウィルバーによるものであった。ウィルバーは当初、以下のように述べていた。

彼 [フェレール] が示しているのは、概ね、心理学やスピリチュアリティに対するグリーン-ミーム的な見解である。[略]単に、好みの問題であって、グリーン-ミーム的の価値に共感する読者は、フェレールに共感するだろう。そして、第二段階の価値 [すなわち、ウィルバー自身のインテグラル理論のようなもの] に共感する読者であれば、フェレールに共感することはないだろう。現段階では、どれだけの議論、エビデンス、事実、美辞麗句を並べ立てようとも、読者には心変わりの決心はつきそうもない [略]。つまり、フェレールの本は、トランスパーソナル・ムーブメントの終わりを告げるものなのである（Paulson, 2002, 段落43より引用）

この一節には当惑してしまう。表向きは、ウィルバー自身の見解を批判に対して優位な立場に置き、さらには、より低次の発達段階や進化段階に留まっているために、ウィルバーのモデル

に同意できないだけであると、暗に述べているのである。

実質的に Wilber (2002) は、『再考』が、遂行的な自己矛盾に陥っており(すなわち、階層的なランク付けを批判しながら、参与的アプローチ自体の優位性を保とうとしていること)、質的差異化を論理的に行うことのできない、彼が呼ぶところのフラットランドを推進していると非難するのである¹⁷。ウィルバーが分析した、反階層的立場の抱える矛盾については同意するが、筆者の研究に対して、そうした批判は適用できないと考えている。先にも述べたように、いかなる伝統やいかなるタイプのスピリチュアリティにも、「客観主義者や存在論的基盤(すなわち、本質的な究極の現実に相当する、かつ／あるいは本質的に優れている、一神教、多神教、あるいは非二元論)に関して」特権を与えることを提案しているのではない。そうではなく、「実用主義的で変容的な基盤に関して」スピリチュアリティを質的に差異化することのできる基準を提唱しているのである。こうしたランク付けは、先験的な存在論的教義や、推測に過ぎない唯一の非二元的スピリチュアリティの現実との調和といったものに、思想的基盤をおくものではない。そうではなく、批判的判断力に、無我、身体性、統合といった価値を備えさせるためのものであることは、極めて大きな違いである。筆者がこうした価値を支持するのは、それを「普遍的」(そうではないのだが)と考えるからではなく、それを涵養することによって、個人、関係性、社会、惑星が抱える苦悩を効果的に低減できると確信しているからである。したがって、誰しもこれらの基準を批判することはできるが、参与的アプローチを、相対主義的あるいは自己矛盾的であると常に決めつけることはできないというのが、ウィルバーの批判に対する回答である。

宇宙-元型的批判

Goddard (2009) は、『トランスパーソナル理論と占星術的マンドラ (*Transpersonal Theory and the Astrological Mandala*)』で、参与的アプローチの中心的側面やウィルバー理論への批判を支持しつつ、重大な四つの批判を展開している。第一に、Goddard (2009) は、スピリチュアルな覚醒の最初の段階——個人と神秘との間に、創造的な両極性がまだ存在している段階——では、参与的エナクトメントは認識論的にも妥当性があるものの、「参与すべき存在が何も無い [略] 絶対的同一性」(p.614) が生じる最終段階では、妥当性がなくなると主張する。ゴダードの「宇宙-トランスパーソナルモデル」は、ウィルバーの理論に比べ、より共創造的で柔軟性があり、線形的ではない。一方でウィルバーが普遍的と主張する、スピリチュアリティの実現の強制的最終段階である、一元的非二元論のスピリチュアリティを支持している。しかし、ウィルバー同様にゴダードも、この教義的ともいえる立場を支持する、説得力のある証拠や議論を提示できてはいない。

第二に Goddard (2009) は、スピリチュアルな多様性を主張することは、唯一の究極を仮定することに劣らず偏った見方であると述べ、参与的多元主義に反論した。しかしこの批判は、一見したところ、誤解から生じたものである。先に見た通り、参与的多元主義は、「より緩やかなスピリチュアリティの普遍主義」に基づいている。それは、共創造された全てのスピリチュアルな究極に内在する、共有された未知の神秘やスピリチュアルな力を認めることで、ペレニアリズムの歪曲や、一对多のいずれかに極めて優れたものとして特権を与えることを回避するものである。すなわち「スピリットの自己開示から一对多の間の永続的な弁証法的運動が生じ

るが、それらの間に抽象的あるいは絶対的な階層的配列を見出すことは誤りである」(Ferrer, 2002, p. 191)。したがって参与的アプローチは、ゴダードが考えたような「可能性ある全ての究極を超えた究極を否定」(p. 623) しようとするものではない。むしろ、このアプローチは、怪しげなペレニアリストの言う、いくつかの宗教的究極の間の等価性を拒絶し、代わりに、客観主義的推論やペレニアリストのアプローチから示唆される教義的階層性とは無縁の、エナクトメントによる代替的認識を提供するのである。

第三に、興味深いことに、Goddard (2009) は、参与的アプローチが「成ること (Becoming)」を重視すると考え、そのことと、ペレニアリズム主義者による存在の基盤への回帰とを対比している。Goddard (2009) は、ペレニアリズム主義者の見解を好み、「参与すること、それ自体は基盤へと回帰しているのであり [略] 論理的には、いかなる実在も基盤と参与的に関わっていると言うことはできない」(p. 623) と指摘した。これは、良い指摘である。ペレニアリズム主義者が存在の基盤への回帰——偽ディオニシウスや聖ボナヴェントゥラなど、新プラトン派の、神秘に対する「エマナティオや回帰の形而上学」から派生している (Harmless, 2008) ——という見解をもつものに対して、筆者は、神秘、宇宙、かつ／あるいはスピリットが、原初的狀態である未分化な統一から、無限の調和内差異 (infinite differentiation-in-communion) の状態へと発展していくという立場をとっている¹⁸。たとえ存在の基盤への回帰が、コスモスの進化の最終目標であったとしても、参与的な人々が存在し続ける方法で、こうした発想は描かれるのである (cf. Bache, 2000)。

最後に Goddard (2009) は、参与的視座では、「スピリチュアルな領域に、異なるレベルの洞察、

明瞭さ、倫理的態度がある」(p. 616) ことが認められていないと論じた。また、スピリチュアリティのランク付けを猛烈に批難するにもかかわらず、参与的アプローチそのものがそうした特徴を有しているとも主張した。後者の批判については、先のウィルバーへの回答の中で扱った。ここでは、前者の批判に焦点をあてるが、筆者が強調する、自我中心性や解離性の超克には、倫理面の質的差異化が必要となるため、ゴダードの批判には困惑している。スピリチュアルな洞察のレベルに関する批判にしても、筆者が受容するのは、各伝統内での大望にしかすぎないという条件で描かれた洞察である。そして、純粋思惟論に基づく文化横断的なランク付けの正当性には、慎重であるべきだと強く考えている。結局のところ、ある伝統が究極の解放とみなす真の洞察（例えばヴェーダ哲学における自己実現に関する一元論）が、他の伝統（例えば仏教）では錯覚や無知の決定的サインと見なされる場合がある (Ferrer, 2002)。したがって、スピリチュアルな知識の主張を文化横断的に査定する中で生じる、実践的成果や変容的成果に着眼することの方が、より適切で生産的なのではないかと考えている。

参与的アプローチからの批判

参与的転回のいくつかの側面に対する批判は、参与的転回に利点を感じている研究者から提唱されている。Lahood (2008) は重要な論文の中で、筆者が用いた多くの陸地をもつ海というメタファー（自己中心性の超克を共有しているとは言え、もとは、エナクトメントされたスピリチュアルな究極が多面的であることを記述するために用いた）を批判した。つまり、多様なスピリチュアルな世界が孤立した一種の「宇宙的多文化性 (cosmological multiculturalism)」の結果として、このメタファーが生じてしまったと指摘するのである。Lahood (2008) は、こ

の解放論に伴う問題とは、様々なスピリチュアルな世界の間、頑強な境界線が設けられてしまうことだと言う。また、しばし新たな洞察や伝統を生み出す様々な宗教形態同士の混合や融合を意味する、「宇宙論的混成 (cosmological hybridization)」の可能性についても論じられていないと指摘する。Lahood (2008) は、「フェレールのいう多くの大陸をもつ海とは [略] 実際のところ、混成の魂の風景から構成されているのだろう。言い換えるなら、多くの混成物間の混成物をもつ海である」(p. 180) と結論付けている。

Lahood (2008) が、参与的多元主義において、スピリチュアルな世界やスピリチュアルな究極の有する自律性や多様性が強調され、トランスパーソナルな (ネオ・) ペレニアリズムが論破されたことに言及しているのは正しい。しかし Lahood (2008) の論では、参与的アプローチが、スピリチュアルな宇宙論を根本的に分断してしまうのを否定していることが、見逃されている。

筆者が、生存可能性のあるスピリチュアルな道程や目標を擁護することで、それらの等価性や共通要素が排除されることはない。換言すれば、様々な神秘主義的伝統が、様々なスピリチュアリティの領域をエナクトメントし、開示しているが、二、三の伝統は、その道程や目標のうちに、特定の要素を共有しているかもしれない。[略] この文脈では、Vroom (1989) が提唱する「宗教の多中心的視点」は真剣に検討されるべきである。この考えでは、いくつかの伝統が多様な独立性をみせながらも、その関心の中心は、潜在的には重なっているとみなされる。(Ferrer, 2002, pp. 148-149)

換言すれば、伝統的実践によって特定のスピ

リチュアルな世界がエナクトメントされても (例えば、伝統的なパタンジャリ・ヨーガによって、サーンキヤ学派哲学の二元性形而上学に関する、経験的確認を得ることができる)、こうした世界が互いに完全に孤立しているわけではない。筆者は「混成」という用語を用いてはいないが、参与的アプローチでは、宗教間の相互作用や (後続する) 新規のスピリチュアルな表現が重視されるため、融合の可能性を期待するのは自然なことなのである。さらに、Lahood (2010a) が論じる、トランスパーソナル運動が本質的にもつ混成性という観点で言えば、参与的アプローチそれ自体は、一方では東洋、西洋、先住民の伝統を、他方では、現代のスピリチュアリティ、哲学、科学の方向性を、宇宙論的に混成した成果とみなすこともできる。いずれにせよ、こうした重要な現象に関する、Lahood (2008) の歓迎すべき論考に従い、宗教の未来に関する最近の小論では、いくつかの種類のスピリチュアリティの混成 (概念、実践、ビジョン) について考察し、以下のように結論付けた。

宗教の未来は、スピリチュアルに個性化された人々によって発展していくだろう。それは、敬意と礼節という地球規模の秩序を守るスピリチュアルな共同体という文脈において、宇宙論的混成のプロセスに携わっている者たちである。(Ferrer, 2010, p. 146)

要約すると、参与的アプローチに対する批判のほとんどは、次のどちらかである。一つは、ペレニアリズムのような、別の存在論の枠組みや形而上学の枠組みに対する固執から生じたものである。もう一つは、参与的アプローチに関する筆者の初期の主張が不明確であったために、参与的アプローチの主張のいくつかは、議論の余地を残した形で誤解されていることである。本論を通して、そうした不明確な点と、存在論に対す

る反論の本質を明らかにできていれればと思う。

参与的ムーブメントの本質と展望に関する省察

本稿を通して、参与的視座の本質について4つの結論が得られた。同時にそれは、今後の展望を提案し支持するものでもあった。第一に、過去10年の間に、トランスパーソナル学や、意識研究、ホリスティック教育やインテグラル教育、宗教学などの隣接領域において、参与的視座に関する文献が増加していた。第二に、参与のアプローチは、学術的モデル、理論的方向性、概念的革命や一つのパラダイムとしてさえ正当に認識されているが、パラダイム上の画期的な出来事として位置づけてよいかは不明である。トランスパーソナル学領域において、豊かで多様な理論的視座を提供してきたが（Cunningham, 2007, 2011; Daniels, 2005; Rothberg & Kelly, 1998）、この領域には、いずれも実り多き様々な理論的方向性——例えば、螺旋-力動性、構造主義、ペレニアリスト、参与性、宇宙-元型性、社会科学など——が存在し続けていくであろうし、それによって、トランスパーソナルな現象や研究の様々な側面が明らかになっていくことは間違いないだろう。トランスパーソナル学者は、こうした理論的方向性の相違点、相補性、統合の可能性を探索する重要な段階を経てきたが（Daniels, 2005, 2009; Goddard, 2005, 2009; Ianiszeskwi, 2010; Washburn, 2003）、より十全に、より包括的にトランスパーソナルな現象を理解するための研究が、今後必要となる。

第三に、参与的スピリチュアリティは、スピリチュアルな問題を批判的に洞察する資源を提供するが、参与的ムーブメント（あるいは、いかなる特定の参与的アプローチであれ）を、他

の伝統の上位に位置するスピリチュアルな伝統とみなすのは誤解であろう。そうではなく、参与的スピリチュアリティは、スピリチュアルな方向性の一つ（すなわち、身体性、統合、関係性、創造的探究に向けた）として理解したほうがよい。そしてこの方向性は、程度の差こそあれ、現存する多くの伝統において見出すことができ（Ferrer & Sherman, 2008aを参照）、現代において伝統を再生し続ける中でもますます活発になっている（例えば、Fox, 2002; Lerner, 2000; Ray, 2008; Whicher, 1999）。それはまた、新たな宗教的表現を生み（例えば、Ferrer, 2003; Heron, 1998）、新たな宗教的伝統やスピリチュアルな伝統を創発させるものかもしれない。

第四に、おそらく最も重要なことなのだが、筆者は参与的動向を、その研究の現況を知るにつけ、学術的／スピリチュアルな感性を共有する独立した思想家からなる、「ネットワーク」として考えるようになった（例えば、スピリチュアルな知のもつ共創造的な本質、身体化や多次元的認知が担う中心的役割、スピリチュアルな多元主義の重要性等）。筆者にとって参与的動向とは、一つの学派や、伝統的な学校組織によって形式化された学問ではないのである。将来、参与的アプローチに関する協会、プログラム、雑誌、書誌集などが立ち上げられるだろうが、参与的ムーブメントのネットワーク的性質は、少なくとも以下の二点において有益である。一つには、ネットワークというのは、学術的孤立を防ぎ、参与的視座が分野横断的に普及するのを助長する。学術的孤立とは、多くの思想を悩ますもので、内輪のメンバーによる学術的対話でしか、自分たちの活動をくまなく調べることができなくなってしまうがちな状態である。同様に、クリップナーは、アメリカ心理学会（APA: American Psychological Association）でトランスパーソナル心理学の分科会を設立することに反

対する中で、APA が人間性心理学の分科会を設立したことに伴う難点を指摘した。すなわち、分科会を設立したために、現 APA グループを通して心理学領域に行き渡っていたかもしれない、人間性心理学の影響力が弱まってしまったと言うのである (Schroll, Krippner, Vich, & Mojeiko, 2009, pp.42-43)。

もう一つには、ネットワークが本質的に有する多元主義的な特徴により、一思想に比べて、理論的多様性が守られる (例えば、英国の科学と医療ネットワークを考えてみよ)。思想というものはしばしば、特定のパラダイムに基づく仮定や概念的枠組みへのコミットメントを通して、それぞれのもの同一性を獲得しようとする。したがって、ネットワーク型の組織というのは、参与的動向の多元主義的精神とも合致するし、特定のモデルへの早まったコミットメントや統一理論への収束願望などによる、先験的な理論的拘束を強要することもないため、実り豊かなものとなる。最後に、ネットワークのもつ分散化という特徴は、多くの参与的思想家 (例えば Heron, 1998, 2006) によって主張された、社会や宗教の階層的傾向や権威主義的傾向への批判とも矛盾しない。そして、それはまた、知の生成、アクセス、分布に関するピアツーピア・モードのような、関連する提案 (Bauwens, 2007) とも一致している。

最後に、他の研究者の考えや視点を対話に取り入れ、参与的思想を新たな方向や新たな領域に拡張するため、他の研究者を招待して本稿を締めくりたい。筆者は、参与的アプローチが、宗教間のより豊かな相互作用を促進し、スピリチュアルな道程を共創造する人々を力づけ、そして最も根本的なこととして、万物が生ずる神秘へとより十全に参与するための、有益な理解と実践を提供できると確信し、前進している。

註

- 1 正確には、筆者の参与的視座について論じた小論 (Ferrer, 1998a, 1998b, 2000a, 2000b, 2001) が出版された後、2001年10月に著書が出版された。『再考』は、1994年から1998年の間に執筆され、1999年、博士論文としてまとめられた (Ferrer, 1999a)。
- 2 筆者の参与的視座は、スピリチュアリティ、心理学、哲学に関する多くの学問や、筆者自身の活きたスピリチュアルな探究の影響に加え、Tarnas (1991) の参与的認識論、Maturana & Varela (1987 菅訳 1997; Varela et al., 1991 田中訳 2001) の認知のエナクティブ・パラダイム、アルバレダ (Albareda, R. V.) とロメロ (Romero, M. T.) のホリスティック・インテグレーション (Ferrer, 2003)、Kremer (1994) の先住民に関する参与的研究、Panikkar (1984, 1988) の宗教に関する多元的説明などに負うところが大きい。とりわけ、急進的な参与的思想家であり実践家の Heron (1992, 1998, 2006) との交流によって、筆者の視点は発展し、改善された。また、筆者の研究は、Wilber (1995 松永訳 1998) のインテグラル理論や他の古典的なトランスパーソナルモデルとの対比の中で、重要な点を創発させてきた。
- 3 『再考』は、スペイン語、ロシア語、イタリア語などに翻訳され、ワールドワイドウェブ上でも広く議論が行われているが、本論は、若干の例外を除き英語で書かれた学術書や学術論文を対象とする。参与的スピリチュアリティに関するインターネットの情報源としては、パウエンズ (Bauwens, M.) の P2P (<http://p2pfoundation.net>)、カボット (Cabot, Z.) の参与的研究 (www.participatorystudies.com) がある。
- 4 この節の「また／あるいは (and/or)」という表現は、きわめて重要である。参与的思想家のほとんどがスピリットの存在論的な自治を認めてはいるものの、スピリチュアルな知の参与的理解を受け入れることと、宗教家や超自然主義者のもつ前提や観点とが、必ずしも結び付けられるわけではない。超自然主義のように、スピリットという用語を、生命、物質、現実のもつ新生で創造的な可能性と理解し換言するのであれば、スピリチュアリティ研究で参与的という用語が意味するところは、事実上同じものとなる。さらに、神秘を説明するために用いる「未知 (underdetermined)」という用語は、多くの場合遂行的表現である。すなわち、それによって、存在を創造する源にアプローチする際、筆者が最も有益で適切であると感じている、知らない (not-knowing) という感覚や知性の謙虚さが喚起されるのである。また、「未知」という用

語によって、神秘の確定性と不確定性は、ともに開かれたものとなる（同様に、一見すると対極にあるこれら二つの説明は逆説的に重なり合い、あるいは同一でさえある）。否定的な意味合いで断言しているのではなく（『再考』で用いた「不確定な (indeterminate)」という用語はそうであったが）、真の創造的な潜在性とは、予め決められ得るものではないと主張しているだけなのである。

- 5 「エナクティブ (enactive)」という用語は、Varela et al. (1991 田中訳 2001) による、認知の非表象的パラダイムの草分け的研究が元となっている。参与的形成では、エナクティブ・パラダイム-元々、自然界の知覚的認知に限定されたものであった-を適用し拡張することで、人間の多次元的な認知、生命の生成的な力、また／あるいはスピリットの生成的な力によって共創造された、存在論的に豊かな宗教界が創発するのを説明している。エナクティブなスピリチュアルな知に関する他の議論としては、Kelly (2008)、Irwin (2008)、Wilber (1995 松永訳 1998) を参照。
- 6 Chaudhuri (1977) による人間の個人的側面、関係性的側面、超越的側面や (Shirazi, 2005も参照)、Heron (2006, 2007) による、スピリチュアルな探究の活性化、関与、悟りなども参照。
- 7 「等」優位性、「等」潜在性、「等」多元性といった語を用いることで、反階層的な平等主義が強調される嫌いがあるため、スピリチュアリティ言説においてウィルバーが行った、いわゆる「グリーン・ミーム」批判が懸念される。参与的アプローチに対するウィルバーの「グリーン・ミーム」批判への回答は、Ferrer (2002, pp. 223-226) や以下の議論を参照。また、ウィルバーが「グリーン・ミーム」を誤用していることへの批判として、クレア・グレイブスの学徒の一人である Todorovic (2002) を参照。
- 8 「可能性」と強調したのは、全てのスピリチュアルな伝統-身体から切り離され、地球を否定する教義や実践を布教し続けているものであっても-が、よりホリスティックな観点から正当に再構想され得るということを示すためである (Ferrer, 2008b, 2010, 2011b を参照)。パタンジャリ・ヨガのシステムを例にとると、元々は、身体、マインド、物質（「プラクリティ」）から独立（「カイバルヤ」）した純粹意識という、明らかに分離した自己同定を目的としていたが、今日では、非常に統合的で身体化された観点から概念化され、広く実践されている（例えば Whicher, 1999）。
- 9 こうしたエナクトメントは、それぞれのスピリチュアルな世界において究極的なものになる。しかし

このことは、様々な伝統の究極的なものを相対化したり、それを超越した、上位の究極的なスピリチュアリティの対象を仮定したりするのではない。後に論じるように筆者は、エナクティブ・パラダイムによって、スピリチュアルな認知に対する表象的説明や客観主義的説明から離れることができるだけでなく、神秘とそのエナクトメントの間にある、未解決の二元論を回避することができるかと確信している。中立的とは言えないが、こうした神秘についての見解は、他のものにくらべて特に信頼に値するスピリチュアルな見方であることを、『再考』で主張した (Ferrer, 2002, pp. 178-181)。確かに、いかなる枠組（参与的なものであれ別のものであれ）も、ある視点を優先せざるを得ないし、階層性は、人間の言語や思考に固有のものであると言える（もっとも、この点については、世界内に存在する仕方でも超克可能であることを論じるつもりである）。しかし、筆者の研究では対照的に、神秘に関する歴史的教義的な信条（例えば、個人、人間でないもの、一元論、二元論、非二元論等を究極的なものと見なす）に基づく、一定の問題を含んだ階層性を「最小化」する枠組みを築こうとしている。その一方で、分離し、身体から切り離され、圧政的なヴィジョンや実践に対する批判のための基盤は残している。筆者の主張は、教義によるランク付けに関する疑問を完全に解決したわけではないが、次のような方法でその疑問が緩和されることを主張しておく。すなわち、スピリチュアリティに質的な差異化を生じさせる変容的成果に焦点をあてたり（解放的認識論）、神秘を様々なエナクトメントすることで実現する平等なホリスティックなヴィジョンが、多様である可能性を認めたりすること（等多元性の原則）である。

- 10 Heron (2011年5月8日私信による) が鋭くも指摘したように、解離性テスト、自我中心性テスト、環境-社会-政治性テストはそれぞれ、参与的スピリチュアリティの、個人内次元、超個人次元、個人間次元に関係している。
- 11 Washburn (2003) が、参与的アプローチではスピリチュアリティの普遍主義と多元主義の間の創造的で弁証法的な関係が肯定されていること（この重要な問題については、Puhakka, 2008も参照）を支持しているのは特筆に値する。また、Daniels (2009) は、螺旋-力動的視座と参与的視座が、矛盾なく整合していることを主張している。筆者は、これらの視座が、将来的な統合のために、身体化、関係性、内在的／スピリチュアルな統合を強調していることには同意する。その一方で、Washburn (1995 安藤・是恒・高橋訳 1997) が、スピリチュ

アルな現実の存在論的認識に対する新カント派の不可知論を引き合いにだしていることと、参与的アプローチが、それらのもつ共創造的存在論的価値を是認 (Ferrer, 2011b を参照) していることの間には、重要な理論的相違点があるように思う。しかしながら、Janiszewski (2010) が論じたように、ウォシュバーンの力動的基盤と、存在論的に豊富にエナクトメントされたスピリチュアルな現実の根源として仮定される、参与的な純粋思维的場を結びつけることによって、螺旋-力動的方向性と参与的な方向性は矛盾なく統合できるかもしれない。

- 12 参与的思想の歴史的ルーツは、Ferrer & Sherman (2008b)、Sherman (2008)、Kelly (2008) で論じられた。近年の先例となる研究として、Buber (1970 田口 訳 1978)、Chaudhuri (1974, 1977)、Berman (1981)、Tambiah (1990)、Tarnas (1991)、Heron (1992, 1998)、Panikkar (1993)、Reason (1994)、Skolimowski (1994)、Kremer (1994)、Abram (1996) が挙げられる。また、『レヴィジョン』誌掲載の小論『参与的世界観に向けて—パート 1 & 2—』(Torbert & Reason, 2001; Reason & Torbert, 2001) も参照のこと。この小論の中でタルナスは、「参与」という用語に含まれる様々な意味を解説している。
- 13 参与的思想は、その他の領域でも息衝いている。一例として、質的研究 (例えば、Hiles, 2008; Reason & Bradbury, 2007)、エコ心理学 (例えば、Abram, 1996; W.W. Adams, 2005)、先住民研究 (例えば、Bastien, 2003; Marks, 2007)、人類学 (例えば、Lahood, 2007c; Tambiah, 1990)、現代キリスト神学とスピリチュアリティ (例えば、Burns, 2002; Dreyer & Burrows, 2005; Minner, 2004) などが挙げられる。
- 14 ここに挙げた著者全員が、自らを参与的アプローチの研究者と必ずしも考えているわけではない。むしろこの著者らは、トランスパーソナルな談話やスピリチュアリティの談話において、参与的視座を支持し、後押しし、発展させている。この小論の結論でも述べる通り、参与的思想は、成員に明確な独自性をもたらす、形式化された学派の中で具現化されるものではない。むしろ、スピリチュアリティへの参与的な感性や、非常に多様な研究者-実践者から成るネットワークに開かれた学問の中で具現化される。
- 15 この小論は、多くの著作 (例えば、Ferrer, Romero, & Albareda, 2006, 2007, 2010a, 2010b) で再版されただけでなく、主要な教育系学会で行われた多くの招待講演や総会講演の触媒となった (例えば Ferrer, 2005a, 2005b, 2009a)。
- 16 後の著作 (例えば Ferrer, 2008b, 2010; Ferrer,

Albareda, & Romero, 2004) で、この問題に関する筆者の見解を明らかにした。「筆者は、倫理的な共通点をもつと考えられている、宗教の過去に基づいた『倫理的ペレニアリズム』は、存在しないと主張する。その一方で、将来の地球規模の倫理は、非常に多様化し曖昧な倫理的宗教の歴史から出現するのではなく、現代の倫理的洞察という文脈において、そうした歴史を我々が批判的に内省した結果創発する可能性が高いのではないだろうか」(Ferrer, 2008b, p. 143)

- 17 とりわけ、『再考』では、ウィルバーの批判を予測し対策を講じており、遂行的自己矛盾に関する批判への回答として Ferrer (2002, pp.179-181; 1998a) を、「グリーン-ミーム」批判に対する回答として Ferrer (2002, pp.223-226) を参照されたい。なお Wilber (2002) は、こうした返答に対する回答を行っていない。また、Ferrer (2002, pp. 66-69) と同様に、筆者は早い段階で、ウィルバーのスピリチュアリティの認識論を批判したが (Ferrer, 1998b)、ウィルバーが、その批判に対する自身の回答に再び言及することはなかった。
- 18 Gleig & Boeving (2008) は、この形而上学の起源を、「個性を失うこと無しに結びつくことを可能にする」(p.68) 親密な関係の自律性という、現代的な精神分析の理想に求めた。この論述に関するロマン派的なルーツや神秘主義的なルーツとして、Kirschner (1996) を参照。

引用文献

- Abram, D. (1996). *The spell of the sensuous: Perception and language in a more-than-human world*. New York, NY: Vintage Books.
- Abram, D. (2007). Earth in eclipse. *ReVision: A Journal of Consciousness and Transformation*, 29(4), 10-22.
- Achterberg, J., & Rothberg, D. (1998). *Relationship as spiritual practice*. In D. Rothberg & S. Kelly (Eds.), *Ken Wilber in dialogue: Conversations with leading transpersonal thinkers* (pp. 259-274). Wheaton, IL: Quest Books.
- Adams, G. (2003). [Review of the book *Revising transpersonal theory: A participatory vision of human spirituality*, by J. N. Ferrer]. *Journal of Contemporary Religion*, 18(3), 431-433.
- Adams, G. (2011). [Review of the book *The participatory turn: Spirituality, mysticism, religious studies*, edited by J. N. Ferrer and J. H. Sherman]. *Journal of Contemporary Religion*, 26(1), 154-156.
- Adams, W. A. (2006). Transpersonal heterophenomenology?

- Journal of Consciousness Studies*, 13(4), 89–93.
- Adams, W. W. (2005). Basho's therapy for Narcissus: Nature as intimate other and transpersonal self. *Journal of Humanistic Psychology*, 50(1), 38–64.
- Akyalcin, E., Greenway, P., & Milne, L. (2008). Measuring transcendence: Extracting the core constructs. *The Journal of Transpersonal Psychology*, 40(1), 41–59.
- Almaas, A. H. (1988). *The pearl beyond price. Integration of personality into being: An object relations approach*. Berkeley, CA: Diamond Books.
- Almaas, A. H. (1996). *The point of existence: Transformations of narcissism in self-realization*. Berkeley, CA: Diamond Books.
- Almaas, A. H. (2002). *Spacecruiser inquiry: True guidance for the inner journey*. Boston, MA: Shambhala.
- Almendro, M. (2004). *Psicología transpersonal: Conceptos clave*. Madrid: Martinez Roca.
- Anderson, R. (2006). Body intelligence scale: Defining and measuring the intelligence of the body. *The Humanistic Psychologist*, 34(4), 375–367.
- Aurobindo, S. (2001). *The life divine (6th ed.)*. Pondicherry, India: Sri Aurobindo Ashram.
- Bache, C. M. (2000). *Dark night, early dawn: Steps to a deep ecology of mind*. Albany, NY: SUNY Press.
- Bailey, G., & Arthur, K. (2011, July). *Stabilizing presence: Using embodied spiritual inquiry and Enneagram attachment narratives to recognize and integrate spiritual experience*. Paper presented at the 16th Global Conference of the International Enneagram Association, Fort Lauderdale, FL.
- Ball, M. W. (2008). *The entheogenic evolution: Psychedelics, consciousness and the awakening of the human spirit*. Rochester, VT: Inner Traditions.
- Banchoff, T., & Wuthnow, R. (Eds.). (2011). *Religion and the global politics of human rights*. Oxford University Press.
- Barnard, G. W. (2008). Pulsating with life: The paradoxical intuitions of Henri Bergson. In J. N. Ferrer & J. H. Sherman (Eds.), *The participatory turn: Spirituality, mysticism, religious studies* (pp. 321–348). Albany, NY: SUNY Press.
- Barnhart, B. (2008). One spirit, one body: Jesus' participatory revolution. In J. N. Ferrer & J. H. Sherman (Eds.), *The participatory turn: Spirituality, mysticism, religious studies* (pp. 265–291). Albany, NY: SUNY Press.
- Bastien, B. (2003). The cultural practice of participatory transpersonal visions. *ReVision: A Journal of Consciousness and Transformation*, 26(2), 41–48.
- Bastien, B., & Kremer, J. W. (2004). *Blackfoot ways of knowing: The worldview of the Siksikaititapi*. Calgary: University of Calgary Press.
- Bauwens, M. (2007). The next Buddha will be a collective: Spiritual expression in the peer-to-peer era. *ReVision: A Journal of Consciousness and Transformation*, 29(4), 34–45.
- Berman, M. (1981). *The reenchantment of the world*. Ithaca, NY: Cornell University Press.
- Bonheim, J. (1997). *Aphrodite's daughters: Women's sexual stories and the journey of the soul*. New York, NY: Fireside.
- Boucoulvas, M. (1999). Following the movement: From transpersonal psychology to a multi-disciplinary transpersonal orientation. *The Journal of Transpersonal Psychology*, 31(1), 27–39.
- Buber, M. (1970). *I and thou* (W. Kaufmann, trans.). New York, NY: Simon & Schuster. (ブーバー, M. 田口義弘 (訳) (1978). 我と汝・対話 みすず書房)
- Burns, C. P. E. (2002). *Divine becoming: Rethinking Jesus and incarnation*. Minneapolis, MN: Fortress Press.
- Butler, K. (1990). Encountering the shadow in Buddhist America. *Common Boundary*, 18(3), 15–22.
- Cabot, Z. (2011). *Spiritual democracy and evolution: Gebser, Whitehead, and the participatory turn* (Doctoral dissertation proposal: California Institute of Integral Studies).
- Caplan, M., Hartelius, G., & Rardin, M. A. (2003). Contemporary viewpoints on transpersonal psychology. *Journal of Transpersonal Psychology*, 35(2), 143–162.
- Chalquist, C. (2009). [Review of the book *The participatory turn: Spirituality, mysticism, religious studies*, edited by J. N. Ferrer and J. H. Sherman]. *The Journal of Transpersonal Psychology*, 41(1), 98–100.
- Chaudhuri, H. (1974). *Being, evolution, and immortality: An outline of integral philosophy*. Wheaton, IL: The Theosophical Publishing House.
- Chaudhuri, H. (1977). *The evolution of integral consciousness*. Wheaton, IL: The Theosophical Publishing House.
- Chittick, W. C. (2008). Ibn al-'Arabi on participating in the mystery. In J. N. Ferrer & J. H. Sherman (Eds.), *The participatory turn: Spirituality, mysticism, religious studies* (pp. 245–264). Albany, NY: SUNY Press.
- Clarke, C. (2009). The reinvention of religion. [Review of *The participatory turn: Spirituality, mysticism, religious studies*, edited by J. N. Ferrer and J. H. Sherman]. *Network Review: Journal of the Scientific and Medical Network*, 100, 55–57.

- Collins, M. (2010). Engaging transcendence actualization through occupational intelligence. *Journal of Occupational Science*, 17(3), 177-183.
- Collins, S. (1998). *Nirvana and other Buddhist felicities*. New York, NY: Cambridge University Press.
- Conner, R. P. (2007). Of travelers, roads, voyagers, and fruits: A meditation on participation. *ReVision: A Journal of Consciousness and Transformation*, 29(3), 18-28.
- Cunningham, P. F. (2007). The challenges, prospects, and promise of transpersonal psychology. *International Journal of Transpersonal Studies*, 26, 41-55.
- Cunningham, P. F. (2011). *Handbook of transpersonal psychology*. Retrieved from <http://www.rivier.edu/faculty/pcunningham/Research/default.html>
- Daniels, M. (2005). *Shadow, self, spirit: Essays in transpersonal psychology*. Charlottesville, VA: Imprint Academic.
- Daniels, M. (2009). Perspectives and vectors in transpersonal development. *Transpersonal Psychology Review*, 13(1), 87-99.
- Dreyer, E. A., & Burrows, M. S. (Eds.). (2005). *Minding the spirit: The study of Christian spirituality*. Baltimore, MD: John Hopkins University Press.
- Eliade, M. (1982). *Cosmos and history: The myth of the eternal return (Ed. Robin Winks)*. New York, NY: Garland Publishers.
- Eller, C. (1993). *Living in the lap of the Goddess: The feminist spirituality movement in America*. New York, NY: Crossroad.
- Faith, E. (2007). Reading, dialogue, healing, a path of growth beyond past, present. *AAP News: The Newsletter of the Association for the Advancement of Psychosynthesis*. (August), 4.
- Ferendo, F. (2007). *Holistic perspectives and integral theory: On seeing what is*. Westerly, RI: Process Publishing Company.
- Ferrer, J. N. (1998a). Beyond absolutism and relativism in transpersonal evolutionary theory. *World Futures: The Journal of General Evolution*, 52, 239-280.
- Ferrer, J. N. (1998b). Speak now or forever hold your peace. An essay review of Ken Wilber's *The marriage of sense and soul: Integrating science and religion*. *The Journal of Transpersonal Psychology*, 30(1), 53-67.
- Ferrer, J. N. (1999a). *Revisioning transpersonal theory: An epistemic approach to transpersonal and spiritual phenomena* (Doctoral dissertation, California Institute of Integral Studies).
- Ferrer, J. N. (1999b). Teoría transpersonal y filosofía perenne: Una evaluación crítica. [Transpersonal theory and the perennial philosophy: A critical appraisal]. In M. Almendro (Ed.), *La consciencia transpersonal* (pp. 72-92). Barcelona, Spain: Kairos.
- Ferrer, J. N. (1999c). Una revisión de la teoría transpersonal [Revisioning transpersonal theory]. *Boletín de la Sociedad Española de Psicología y Psicoterapia Transpersonal*, 3, 24-30.
- Ferrer, J. N. (2000a). The perennial philosophy revisited. *The Journal of Transpersonal Psychology*, 32(1), 7-30.
- Ferrer, J. N. (2000b). Transpersonal knowledge: A participatory approach to transpersonal phenomena. In T. Hart, P. Nelson, & K. Puhakka (Eds.), *Transpersonal knowing: Exploring the farther reaches of consciousness* (pp. 213-252). Albany, NY: SUNY Press.
- Ferrer, J. N. (2001). Toward a participatory vision of human spirituality. *ReVision: A Journal of Consciousness and Transformation*, 24(2), 15-26.
- Ferrer, J. N. (2002). *Revisioning transpersonal theory: A participatory vision of human spirituality*. Albany, NY: SUNY Press.
- Ferrer, J. N. (2003). Integral transformative practices: A participatory perspective. *The Journal of Transpersonal Psychology*, 35(1), 21-42.
- Ferrer, J. N. (2005a, October). *The phenomenon of transformation in integral education*. Keynote speech at the International Transformative Learning Conference, Michigan State University, East Lansing, MI.
- Ferrer, J. N. (2005b, December). *Participatory spirituality and integral education*. Keynote speech at the IV International Conference on the New Paradigm of Science in Education, Social Research Institute of the University of Baja California (UABC), Mexicali Campus, Mexico.
- Ferrer, J. N. (2006). Embodied spirituality, now and then. *Tikkun: Culture, Spirituality, Politics* (May/June), 41-45, 53-64.
- Ferrer, J. N. (2008a). What does it really mean to live a fully spiritual life? *International Journal of Transpersonal Studies*, 27, 1-11. (フェレール, J. N. 中川吉晴・吉嶋かおり (訳) (2012). 完全に身体化された霊的生をいきるとは、どのようなことなのか トランスパーソナル心理学/精神医学, 12, 73-89.)
- Ferrer, J. N. (2008b). Spiritual knowing as participatory enactment: An answer to the question of religious pluralism. In J. N. Ferrer & J. H. Sherman (Eds.), *The participatory turn: Spirituality, mysticism, religious studies* (pp. 135-69). Albany, NY: SUNY Press.
- Ferrer, J. N. (2009a, June). *A participatory model of integral education*. Keynote speech at the Annual Conference of Holistic Education, Japan Holistic Education Society,

- Ritsumeikan University, Kyoto, Japan. (フェレール, J. N. (2009a, 6月). インテグラル教育の参与的モデル 2009年度ホリスティック教育研究大会基調講演 立命館大学)
- Ferrer, J. N. (2009b). Summer course: Embodied transpersonal inquiry. Graduate School of Science for Human Services, Ritsumeikan University, Kyoto, Japan. (フェレール, J. N. (2009b). 夏季講義: 身体化されたトランスパーソナルな探求 立命館大学大学院応用人間科学研究科)
- Ferrer, J. N. (2010). The plurality of religions and the spirit of pluralism: A participatory vision of the future of religion. *International Journal of Transpersonal Studies*, 28, 139-51.
- Ferrer, J. N. (2011a). Teaching the graduate seminar in comparative mysticism: A participatory integral approach. In W. B. Parsons (Ed.), *Teaching mysticism* (pp. 173-192). New York, NY: Oxford University Press.
- Ferrer, J. N. (2011b). Participation, metaphysics, and enlightenment: Reflections on Ken Wilber's recent work. *Transpersonal Psychology Review*, 14(2), 3-24.
- Ferrer, J. N., & J. H. Sherman (Eds.). (2008a). *The participatory turn: Spirituality, mysticism, religious studies*. Albany, NY: SUNY Press.
- Ferrer, J. N., & Sherman, J. H. (2008b). Introduction: The participatory turn in spirituality, mysticism, and religious studies. In J. N. Ferrer & J. H. Sherman (Eds.), *The participatory turn: Spirituality, mysticism, religious studies* (pp. 1-78). Albany, NY: SUNY Press.
- Ferrer, J. N., Albareda, R. V., & Romero, M. T. (2004). Embodied participation in the mystery: Implications for the individual, interpersonal relationships, and society. *ReVision: A Journal of Consciousness and Transformation*, 27(1), 10-17.
- Ferrer, J. N., Romero, M. T., & Albareda, R. V. (2005). Integral transformative education: A participatory proposal. *The Journal of Transformative Education*, 3(4), 306-330. (フェレール, J. N.・ロメロ, M. T.・アルバレダ, R. V. 中川吉晴 (監訳) 白居弘佳 (訳) (2010). 統合と変容のための教育—参与的アプローチの提案 ホリスティック教育研究, 13, 116-138.)
- Ferrer, J. N., Romero, M. T., & Albareda, R. V. (2006). The four seasons of integral education: A participatory proposal. *ReVision: A Journal of Consciousness and Transformation*, 29(2), 11-23.
- Ferrer, J. N., Romero, M. T., & Albareda, R. V. (2007). The integral creative cycle: A participatory model of integral education. *Kosmos: An Integral Approach to Global Awakening* (Fall/Winter), 8-13.
- Ferrer, J. N., Romero, M. T., & Albareda, R. V. (2010a). Integral transformative education: A participatory proposal. *Studies in Holistic Education*, 13, 116-138.
- Ferrer, J. N., Romero, M. T., & Albareda, R. V. (2010b). Integral transformative education: A participatory proposal. In S. Esbjörn-Hargens, J. Reams, & O. Gunnlaugson (Eds.), *Integral education: New directions for higher learning* (pp. 79-103). Albany, NY: SUNY Press.
- Fox, M. (2002). *Creativity: Where the divine and the human meet*. New York, NY: Jeremy P. Tarcher/Putnam.
- Freeman, A. (2006). A Daniel comes to judgment? Dennet and the revisioning of transpersonal theory. *Journal of Consciousness Studies*, 13(3), 95-109.
- Freeman, A. (2007). What is mystical experience? *Sofia—The Sea of Faith Magazine*, 84, Retrieved from <http://www.sofn.org.uk/sofia/84mystical.html>
- Friedman, H. (1983). The Self-Expansiveness Level Form: A conceptualization and measurement of a transpersonal construct. *The Journal of Transpersonal Psychology*, 15, 37-50.
- Friedman, H., Krippner, S., Riebel, L., & Johnson, C. (2010). Models of spiritual development. *The International Journal of Transpersonal Studies*, 29(1), 79-94.
- Fuller, R. (2002). [Review of the book *Revisioning transpersonal theory: A participatory vision of human spirituality*, by J. N. Ferrer]. *Religious Studies Review*, 28(4), 342.
- Ghanea, N. (Ed.). (2010). *Religion and human rights*. New York, NY: Routledge.
- Gleig, A. (2011a). [Review of the book *The participatory turn: Spirituality, mysticism, religious studies*, edited by J. N. Ferrer and J. H. Sherman]. *Spiritus: A Journal of Christian Spirituality*, 11(1), 146-148.
- Gleig, A. (2011b). [Review of the book *The participatory turn: Spirituality, mysticism, religious studies*, edited by J. N. Ferrer and J. H. Sherman]. *Alternative Spirituality and Religion Review*, 2(1), 125-128.
- Gleig, A. (2012). Researching new religious movements from the inside-out and the outside-in: Methodological reflections from collaborative and participatory perspectives. *Nova Religio: The Journal of Alternative and Emergent Religions*, 16, 88-103.
- Gleig, A., & Boeving, N. G. (2009). Spiritual democracy: Beyond consciousness and culture. [Review of the book *The participatory turn: Spirituality, mysticism, religious studies*, edited by J. N. Ferrer and J. H. Sherman]. *Tikkun: Politics, Spirituality, Culture* (May/June), 64-68.
- Gleig, A., Ferrer, J. N., Sherman, J. H., Barnard, W. G.,

- Lanzetta, B., Irwin, L., & Kripal, J. (2010, October). *The Participatory turn: Studying religion beyond the philosophies of consciousness and constructivism*. Panel presented at the 2010 American Academy of Religion Annual Meeting, Atlanta, GA.
- Goldberg, E. (2010). [Review of the book *The participatory turn: Spirituality, mysticism, religious studies*, edited by J. N. Ferrer and J. H. Sherman]. *Sophia*, 49(2), 309–310.
- Goddard, G. (2005). Counterpoints in transpersonal theory: Toward an astro-logical resolution. *ReVision: A Journal of Consciousness and Transformation*, 27(3), 9–19.
- Goddard, G. (2009). *Transpersonal theory and the astrological mandala: An evolutionary model*. Victoria, BC, Canada: Trafford Publishing.
- Grace, F., Sherman, J. H., Ferrer, J. N., Malkemus, S., Klein, A., & Lanzetta, B. (2011, November). *Contemplative studies from a participatory perspective: Embodiment, relatedness, and creativity in contemplative Inquiry*. Panel presented at the 2011 American Academy of Religion Annual Meeting, San Francisco, CA.
- Grof, C., & Grof, S. (1990). *The stormy search for the self*. Los Angeles, CA: J. P. Tarcher. (グロフ, C.・グロフ, S. 安藤治・吉田豊 (訳) (1997). 魂の危機を超えて: 自己発見と癒しの道 春秋社)
- Haar Farris, M. S. (2010). *Participatory wisdom in religious studies: Jacques Derrida, philo-sophia, and religious pluralism* (Doctoral dissertation, Graduate Theological Union).
- Habermas, J. (1984). *The theory of communicative action. Vol. 1. Reason and the rationalization of society*. (T. McCarthy, Trans.). Boston, MA: Beacon Press.
- Harmless, S. J. W. (2008). *Mystics*. New York, NY: Oxford University Press.
- Hartelius, G. (2006). All that glitters is not gold: Heterophenomenology and transpersonal theory. *Journal of Consciousness Studies*, 13(6), 63–77.
- Harvey, P. (1995). *The selfless mind: Personality, consciousness and nirvana in early Buddhism*. Richmond, Surrey, UK: Curzon Press.
- Heim, S. M. (1995). *Salvations: Truth and difference in religion*. Maryknoll, NY: Orbis Books.
- HERI Project Staff. (2005). Spirituality and higher education curriculum: The HERI syllabi project. *Spirituality in Higher Education Newsletter*, 2(2). Retrieved from <http://www.spirituality.ucla.edu/publications/newsletters/2/syllabi.php>
- Heron, J. (1992). *Feeling and personhood: Psychology in another key*. London: Sage.
- Heron, J. (1996). *Co-operative inquiry: Research into the human condition*. London: Sage.
- Heron, J. (1998). *Sacred science: Person-centered inquiry into the spiritual and the subtle*. Ross-on-Wye, UK: PCCS Books.
- Heron, J. (2001). Spiritual inquiry as divine becoming. *ReVision: A Journal of Consciousness and Transformation*, 24(2), 32–41.
- Heron, J. (2006). *Participatory spirituality: A farewell to authoritarian religion*. Morrisville, NC: Lulu Press.
- Heron, J. (2007). Participatory fruits of spiritual inquiry. *ReVision: A Journal of Consciousness and Transformation*, 29(3), 7–17.
- Heron, J., & Lahood, G. (2008). Charismatic inquiry in concert: Action research in the realm of the between. In P. Reason & H. Bradbury (Eds.), *The Sage Handbook of action research: Participative inquiry and practice* (2nd ed.) (pp. 439–449). London: SAGE.
- Heron, J., & Reason, P. (1997). A participatory inquiry paradigm. *Qualitative Inquiry*, 3(3), 274–294.
- Hick, J. (1992). *An Interpretation of religion: Human responses to the transcendent*. New Haven, CT: Yale University Press.
- Hiles, D. R. (2008, November). *Participatory perspectives in counseling research*. Paper presented at the NCCR Conference, Newport, UK. Retrieved from www.psy.dmu.ac.uk/drhiles/
- Hollick, M. (2006). *The science of oneness: A worldview for the twenty-first century*. New York, NY: Maple Vail Press.
- Ianiszewski, P. (2010). Trans-Jungian psychology: An archetypal-noetic model of the psyche from the dialectic-dynamic paradigm and the participatory epistemology. *Journal of Transpersonal Research*, 2, 26–43.
- Irwin, L. (2008). Esoteric paradigms and participatory spirituality in the teachings of Mikhael Aivanhov. In J. N. Ferrer & J. H. Sherman (Eds.), *The participatory turn: Spirituality, mysticism, religious studies* (pp. 197–224). Albany, NY: SUNY Press.
- Jaenke, K. (2004). The participatory turn. [Review of the book *Revisioning transpersonal theory: A participatory vision of human spirituality*, by J. N. Ferrer]. *ReVision: A Journal of Consciousness and Transformation*, 26(4), 8–14.
- Johnson, D. H. (Ed.). (1995). *Bone, breath, and gesture: Practices of embodiment*. Berkeley, CA: North Atlantic Books.
- Juergensmeyer, M. (2000). *Terror in the mind of God: The global rise of religious violence*. Berkeley, CA: University of California Press. (ユルゲンスマイヤー, M. 古賀林幸・櫻井元雄 (訳) (2003). グローバル時代の宗教とテ

- ロリズム：いま、なぜ神の名で人の命が奪われるのか
明石書店)
- Jung, C. G. (2009). *The red book*. (S. Shamdanasi, Ed. and Trans.). New York, NY: W. W. Norton & Company. (ユング, C. G. 河合俊雄 (監訳) 田中康裕・高月玲子・猪股剛 (訳) (2010). 赤の書 創元社)
- Kelly, S. (2008). Participation, complexity, and the study of religion. In J. N. Ferrer & J. H. Sherman (Eds.), *The participatory turn: Spirituality, mysticism, religious studies* (pp. 113–133). Albany, NY: SUNY Press.
- King, M. (2009). *Postsecularism: The hidden challenge to extremism*. Cambridge, UK: James Clarke & Co.
- King, T. (Ed.). (1992). *The spiral path: Explorations in women's spirituality*. Saint Paul, MN: Yes International Publishers.
- Kirschner, S. R. (1996). *The religious and romantic origins of psychoanalysis: Individuation and integration in post-Freudian theory*. New York, NY: Cambridge University Press.
- Kremer, J. (1994). *Looking for Dame Yggdrasil*. Red Bluff, CA: Falkenflug Press.
- Kremer, J. (2007). Ironies of true selves in trans/personal knowing: Decolonizing trickster presences in the creation of indigenous participatory presence. *ReVision: A Journal of Consciousness and Transformation*, 29(4), 23–33.
- Kripal, J. J. (2002). Debating the mystical as ethical: An Indological map. In G. W. Barnard & J. J. Kripal (Eds.), *Crossing boundaries: Essays on the ethical status of mysticism* (pp. 15–69). New York, NY: Seven Bridges Press.
- Kripal, J. J. (2003). In the spirit of Hermes: Reflections on the work of Jorge N. Ferrer. *Tikkun: A Bimonthly Jewish Critique of Politics, Culture & Society*, 18(2), 67–70.
- Kripal, J. J. (2006). Mysticism. In R. A. Segal (Ed.), *The Blackwell companion to the study of religion* (pp. 321–335). Maiden, MA: Blackwell.
- Kripal, J. J. (2010). *Authors of the impossible: The paranormal and the sacred*. Chicago, IL: The University of Chicago Press.
- Lahood, G. (Ed.). (2007a). The participatory turn, Part 1 and 2 [Monograph]. *ReVision: A Journal of Consciousness and Transformation*, 29(3–4).
- Lahood, G. (2007b). The participatory turn and the transpersonal movement: A brief introduction. *ReVision: A Journal of Consciousness and Transformation*, 29(3), 2–6.
- Lahood, G. (2007c). One hundred years of sacred science: Participation and hybridity in transpersonal anthropology. *ReVision: A Journal of Consciousness and Transformation*, 29(3), 37–48.
- Lahood, G. (2008). Paradise bound: A perennial tradition or an unseen process of cosmological hybridity. *Anthropology of Consciousness*, 19(2), 155–189.
- Lahood, G. (2010a). Relational spirituality, part 1. Paradise unbound: Cosmic hybridity and spiritual narcissism in the “one truth” of New Age transpersonalism. *The International Journal of Transpersonal Studies*, 29(1), 31–57.
- Lahood, G. (2010b). Relational spirituality, part 2. The belief in others as a hindrance to enlightenment: Narcissism and the denigration of relationship within transpersonal psychology and the New Age. *The International Journal of Transpersonal Studies*, 29(1), 57–78.
- Lancaster, B. L. (2004). *Approaches to consciousness: The marriage of science and mysticism*. New York, NY: Palgrave Macmillan.
- Lancaster, B. L. (2008). Engaging with the mind of God: The participatory path of Jewish mysticism. In J. N. Ferrer & J. H. Sherman (Eds.), *The participatory turn: Spirituality, mysticism, religious studies* (pp. 173–195). Albany, NY: SUNY Press.
- Lanzetta, B. J. (2008). Wound of love: Feminine theosis and embodied mysticism in Teresa of Avila. In J. N. Ferrer & J. H. Sherman (Eds.), *The participatory turn: Spirituality, mysticism, religious studies* (pp. 226–244). Albany, NY: SUNY Press.
- Lerner, M. (2000). *Spirit matters*. Charlottesville, VA: Hampton Roads.
- Left, L. (2003). *The Kabbalah of the soul: The transformative practices of Jewish mysticism*. Rochester, VT: Inner Traditions.
- Malkemus, S. (2011). *Enaction: Phenomenological, cognitive, and transpersonal perspectives*. Manuscript submitted for publication.
- Marks, L. F. M. (2007). Great mysteries: Native North American religions and participatory visions. *ReVision: A Journal of Consciousness and Transformation*, 29(3), 29–36.
- Maturana, H., & Varela, F. J. (1987). *The tree of knowledge: The biological roots of human understanding*. Boston, MA: New Science Library. (マトゥラーナ, H.・ヴァレラ, F. 菅啓次郎 (訳) (1997). 智恵の樹 筑摩書房)
- Mcdermott, R. (2008). Participation comes of age: Owen Barfield and the Bhagavad Gita. In J. N. Ferrer & J. H. Sherman (Eds.), *The participatory turn: Spirituality, mysticism, religious studies* (pp. 321–348). Albany, NY: SUNY Press.
- Mcintosh, S. (2007). *Integral consciousness and the future*

- of evolution: How the integral perspective is transforming politics, culture and spirituality.* St. Paul, MI: Paragon Press.
- Miller, J. R. (2006). *Educating for compassion and action: Creating conditions for timeless learning.* Thousand Oaks, CA: SAGE.
- Minner, R. (2004). *Truth in the making: Creative knowledge in theology and philosophy.* New York, NY: Routledge.
- Molz, M., & Gidley, J. (2008). A transversal dialogue on integral education and planetary consciousness. *Integral review*, 4(1), 47-70.
- Mukherjee, J. K. (2003). *The practice of integral yoga.* Pondicherry, India: Sri Aurobindo Ashram Press.
- Nakagawa, Y., & Matsuda, Y. (Eds.). (2010). *Integral approach: Integral transformative inquiry.* Kyoto, Japan: Institute of Human Sciences, Ritsumeikan University. (中川吉晴・松田佳子(編)(2010). ヒューマンサービスリサーチ 18 インテグラル・アプローチ—統合的・変容的探究 ヒューマンサービスリサーチ 18 立命館大学人間科学研究所)
- Nelson, L. E. (Ed.). (1998). *Purifying the earthly body of God: Religion and ecology in Hindu India.* Albany, NY: SUNY Press.
- O'connor, M. (2005). In the living spirit: Spirituality, psychic awareness and creativity. *Transpersonal Psychology Review*, 9(1), 50-67.
- Osterhold, H. M., Husserl, R. E., & Nicol, D. (2007). Rekindling the fire of transformative education: A participatory case study. *Journal of Transformative Education*, 5(3), 221-245. (オスターホルド, H. M.・フッサール, R. E.・ニコル, D. 中川吉晴(監訳) 齋藤由香(訳)(2010). 変容的教育にふたたび火をともし—参与の事例— ヒューマンサービスリサーチ, 18, 47-82)
- Palmer, H., & Hubbard, P. (2009). A contextual introduction to psychosynthesis. *Journal of Transpersonal Research*, 1, 29-33.
- Panikkar, R. (1984). Religious pluralism: The metaphysical challenge. In L. S. Rouner (Ed.), *Religious pluralism* (pp. 97-115). Notre Dame, IN: University of Notre Dame Press.
- Panikkar, R. (1988). The invisible harmony: A universal theory of religion or a cosmic confidence in reality? In L. Swidler (Ed.), *Toward a universal theology of religion* (pp. 118-153). Maryknoll, NY: Orbis Books.
- Panikkar, R. (1993). *The cosmotheandric experience: Emerging religious consciousness* (ed. S. Eastham). Maryknoll, NY: Orbis Books.
- Parsons, W. B. (2003). Review of *Revisioning transpersonal theory: A participatory vision of human spirituality.* *Journal of Religion*, 83(4), 692-93.
- Paulson, D. S. (2002). Daryl Paulson on Jorge Ferrer's Revisioning transpersonal theory. Retrieved from <http://wilber.shambhala.com/html/watch/ferrer/index.cfm/>
- Paulson, D. S. (2003). [Amazon review of the book *Revisioning transpersonal theory: A participatory vision of human spirituality*, by Jorge N. Ferrer]. Retrieved from http://www.amazon.com/Revisioning-Transpersonal-Theory-Participatory-Spirituality/dp/0791451682/ref5sr_1_1?ie=UTF8&s5books&qid51302655607&sr51-1
- Paulson, D. S. (2004). Toward a participative integral philosophy. *The International Journal of Transpersonal Studies*, 23, 135-140.
- Péter, B. D. (2009). A transzperszonális pszichológia jelenlegi fejlődését legjobban befolyásoló elméleti megközelítések. [The most influential approaches in the present development of transpersonal psychology]. *Pszichoterápia*, 18(4), 251-260.
- Prabhu, J. (in press). Participatory spirituality and the study of religion. *Religious Studies Review*.
- Puhakka, K. (2008). Transpersonal perspective: An antidote to the postmodern malaise. *Journal of Transpersonal Psychology*, 40(1), 6-19.
- Rachel, A. (2010). *Intimate worlds: An inquiry into the relationship between the human embodied self and nonphysical entities* (Doctoral dissertation proposal, California Institute of Integral Studies).
- Raskin, R., & Terry, H. (1988). A principal-components analysis of the Narcissistic Personality Inventory and further evidence of its construct validity. *Journal of Personality and Social Psychology*, 54, 890-902.
- Ray, R. (2008). *Touching enlightenment: Finding realization in the body.* Boulder, CO: Sounds True.
- Reason, P. (Ed.). (1994). *Participation in human inquiry.* Thousands Oaks, CA: SAGE.
- Reason, P. (2009). A creative unfolding: Peter Reason explores participation in spiritual and religious studies. [Review of the book *The participatory turn: Spirituality, mysticism, religious studies*, edited by J. N. Ferrer and J. H. Sherman]. *Resurgence*, 260, (May/June), web-exclusive. Retrieved from <http://www.resurgence.org/maga-zine/web-exclusives.html>
- Reason, P., & Bradbury, H. (2007). (Eds.), *The Sage handbook of action research: Participative inquiry and practice* (2nd ed.). London: SAGE.
- Reason, P., & Torbert, W. R. (2001). Toward a participatory worldview, Part 2 [Monograph]. *ReVision: A Journal of Consciousness and Transformation*, 23(4).

- Romero, M. T., & Albareda, R. V. (2001). Born on Earth: Sexuality, spirituality, and human evolution. *ReVision: A Journal of Consciousness and Transformation*, 24(2), 5-14.
- Rothberg, D. (2006). *The engaged spiritual life: A Buddhist approach to transforming ourselves and the world*. Boston: Beacon Press.
- Rothberg, D. (2008). Connecting inner and outer transformation: Toward an expanded model of Buddhist practice. In J. N. Ferrer & J. H. Sherman (Eds.), *The participatory turn: Spirituality, mysticism, religious studies* (pp. 349-370). Albany, NY: SUNY Press.
- Rothberg, D., & Kelly, S. (Eds.). (1998). *Ken Wilber in dialogue: Conversations with leading transpersonal thinkers*. Wheaton, IL: Quest Books.
- Rowan, J., Daniels, M., Fontana, D., & Walley, M. (2009). A dialogue on Ken Wilber's contribution to transpersonal psychology. *Transpersonal Psychology Review*, 13(2), 5-41.
- Schroeder, C. S. (1994). *Embodied prayer: Harmonizing body and soul*. Liguori, MO: Triumph Books.
- Schroll, M. A., Krippner, S., Vich, M., Fadiman, J., & Mojeiko, V. (2009). Reflections on transpersonal psychology's 40th anniversary, ecopsychology, transpersonal science, and psychedelics: A conversation forum. *International Journal of Transpersonal Studies*, 28, 39-52.
- Seitz, D. D. (2009). *Integrating contemplative and student-centered education: A synergistic approach to deep learning* (Doctoral dissertation, University of Massachusetts).
- Sellars, W. (1963). *Science, perception and reality*. London: Routledge & Kegan Paul. (セラーズ, W. 神野慧一郎・土屋純一・中才敏郎 (訳) (2006). 経験論と心の哲学 勁草書房)
- Shanon, B. (2002). *The antipodes of the mind: Charting the phenomenology of the ayahuasca experience*. New York, NY: Oxford University Press.
- Sherman, J. H. (2008). A genealogy of participation. In J. N. Ferrer & J. H. Sherman (Eds.), *The participatory turn: Spirituality, mysticism, religious studies* (pp. 81-112). Albany, NY: SUNY Press.
- Shirazi, B. A. K. (2005). Integral psychology: Psychology of the whole human being. In M. Schlitz, T. Amorok, & M. S. Micozzi (Eds.), *Consciousness and healing: Integral approaches to mind-body medicine* (pp. 233-247). St. Louis, MO: Elsevier Churchill Livingstone.
- Skolimowski, H. (1994). *The participatory mind: A new theory of knowledge and of the universe*. New York, NY: Penguin Books.
- Smith, H. (1994). Spiritual personality types: The sacred spectrum. In S. H. Nasr & K. O'Brien (Eds.), *In quest of the sacred: The modern world in the light of tradition* (pp. 45-57). Oakton, VA: Foundation for Traditional Studies.
- Subbiondo, J. L. (2006). Integrating religion and spirituality in higher education: Meeting the global challenges of the 21st century. *Religion & Education*, 33, 1-19.
- Tambiah, S. (1990). *Magic, science, religion, and the scope of rationality*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Tarnas, R. (1991). *The passion of the Western mind: Understanding the ideas that have shaped our world view*. New York, NY: Ballantine Books.
- Tarnas, R. (2001). A new birth in freedom: A (p)review of Jorge Ferrer's *Revisoning transpersonal theory: A participatory vision of human spirituality*. *The Journal of Transpersonal Psychology*, 33(1), 64-71.
- Tarnas, R. (2002). Foreword. In J. N. Ferrer. (2002). *Revisoning transpersonal theory: A participatory vision of human spirituality* (pp. vii-xvi). Albany, NY: SUNY Press.
- Tarnas, R. (2006). *Cosmos and psyche: Intimations of a new world view*. New York, NY: Viking.
- Tarnas, R. (2007). Two suitors: A parable. *ReVision: A Journal of Consciousness and Transformation*, 29(4), 6-8.
- Tart, C. (2006). Current status of transpersonal psychology. *Journal of Consciousness Studies*, 13(4), 83-87.
- Taylor, C. (1989). *Sources of the self: The making of the modern identity*. Cambridge, MA: Harvard University Press. (テイラー, C. 下川潔・桜井徹・田中智彦 (訳) (2010). 自我の源泉：近代的アイデンティティの形成 名古屋大学出版会)
- Todorovic, N. (2002). The mean green meme hypothesis: Fact or fiction? Retrieved from http://www.spiraldynamics.org/documents/MGM_hyp.pdf
- Torbert, W. R., & Reason, P. (2001). Toward a participatory worldview, Part 1 [Monograph]. *ReVision: A Journal of Consciousness and Transformation*, 23(3).
- Varela, F., Thompson, E., & Rosch, E. (1991). *The embodied mind: Cognitive science and human experience*. Cambridge, MA: The MIT Press. (ヴァレラ, F.・トンブソン, E.・ロッシュ, E. 田中靖夫 (訳) (2001). 身体化された心：仏教思想からのエナクティブ・アプローチ 工作舎)
- Vennard, J. E. (1998). *Praying with body and soul: A way to intimacy with God*. Minneapolis, MN: Augsburg.
- Victoria, B. D. (2006). *Zen at war* (2nd ed.). New York, NY: Rowman & Littlefield.
- Voss, A. (2009). A methodology of the imagination. *Eye of*

- the Heart: A Journal of Traditional Wisdom*, 3, 37-52.
- Wade, J. (2004). *Transcendent sex: When lovemaking opens the veil*. New York, NY: Paraview Pocket Books.
- Walach, H., & Runehov, A. L. C. (2010). The epistemological status of transpersonal psychology: The database argument revisited. *Journal of Consciousness Studies*, 17(1-2), 145-165.
- Walsh, R. N., & Vaughan, F. (1993). On transpersonal definitions. *The Journal of Transpersonal Psychology*, 25(2), 199-207.
- Washburn, M. (1995). *The ego and the dynamic ground: A transpersonal theory of human development* (2nd ed.). Albany, NY: SUNY Press. (ウォッシュバーン, M. 安藤治・是恒正達・高橋豊 (訳) (1997). 自我と<力動的基盤>: 人間発達のトランスパーソナル理論 雲母書房)
- Washburn, M. (2003). Transpersonal dialogue: A new direction. *The Journal of Transpersonal Psychology*, 35(1), 1-4.
- Welwood, J. (2000). *Toward a psychology of awakening: Buddhism, psychotherapy, and the path of personal and spiritual transformation*. Boston, MA: Shambhala.
- Whicher, I. (1999). *The integrity of the yoga darsana: A reconsideration of the classical yoga*. Albany, NY: SUNY Press.
- Wilber, K. (1995). *Sex, ecology and spirituality: The spirit of evolution*. Boston, MA: Shambhala. (ウィルバー, K. 松永太郎 (訳) (1998). 進化の構造<1><2> 春秋社)
- Wilber, K. (1998). Response to Jorge Ferrer's "Speak now or forever hold your peace. A review essay of Ken Wilber's *The marriage of sense and soul*." *The Journal of Transpersonal Psychology*, 30(1), 69-72.
- Wilber, K. (2002). Participatory samsara: The green-meme approach to the mystery of the divine. Retrieved from http://wilber.shambhala.com/html/books/boomeritis/side_bar_f/index.cfm/
- Wilber, K. (2006). *Integral spirituality: A startling new role for religion in the modern and postmodern world*. Boston, MA: Integral Books. (ウィルバー, K. 松永太郎 (訳) (2008). インテグラル・スピリチュアリティ 春秋社)
- Williams, L. (2006). Spirituality and Gestalt: A Gestalt-transpersonal perspective. *Gestalt Review*, 10(1), 6-21.

著者

ホルヘN.フェレール (Jorge N. Ferrer)

サンフランシスコにあるカリフォルニア統合学研究所 (CIIS) 東西心理学部学科長。著書に『トランスパーソナル理論再考』(Revisoning Transpersonal Theory, Albany: SUNY Press, 2002)、シャーマン, J. Hとの共編著に『参与的転回: スピリチュアリティ、神秘主義、宗教研究』(Participatory Turn, Albany: SUNY Press, 2008)がある。2000年、意識に関する独創的研究が評価され、フェッツァー研究所所長賞を受賞。2009年、国際的な宗教間の葛藤を解決することを目的とした調査プロジェクトに関する、国連平和のための諸宗教組織のアドバイザーに着任。スペイン、バルセロナ出身。

原著の出版

Ferrer, J. N. (2011b). Participatory spirituality and transpersonal theory: A ten-year retrospective. *Journal of Transpersonal Psychology*, 43(1), 1-34.

訳注

- [a] トランスパーソナル心理学研究 (*Journal of Transpersonal Psychology*)
- [b] ペレニアリズム (perennialism) は、「永遠の哲学」とも訳されるが、筆者 (Ferrer) の支持する参与的アプローチからして、「普遍 (あるいは不変)」としての意味合いが込められる場合があることを想定し、本論では「ペレニアル」等のカタカナ表記を用いている。
- [c] エナクティブ (enactive) やエナクトメント (enactment) は、本来、「成立」、「上演」、「再演」等の意味をもつ。また、本論でも引用されている Varela, Thompson, & Rosch (1991 田中訳 2001) は、エナクトメントを、「認知が所与の心による所与の世界の表象ではなく、むしろ世界の存在体が演じる様々な行為の歴史に基づいて世界と心を行為から算出すること」(p. 31)と定義している。本論では、基本的にはカタカナ表記 (エナクトメント、エナクティブ等) を用い、文脈に応じて日本語訳をあてた。